

568-361

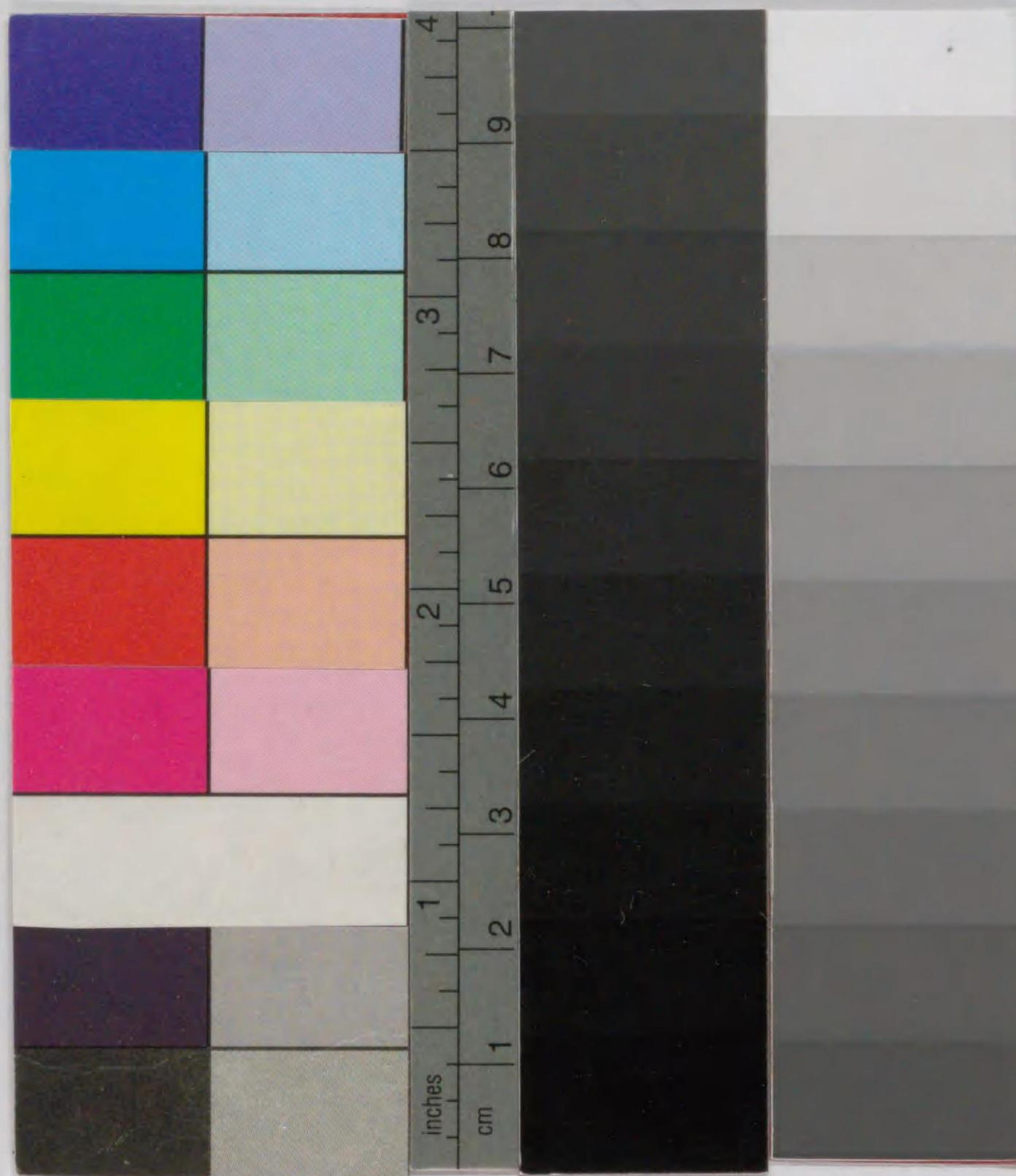


1200501515964

568

61

口
複
写

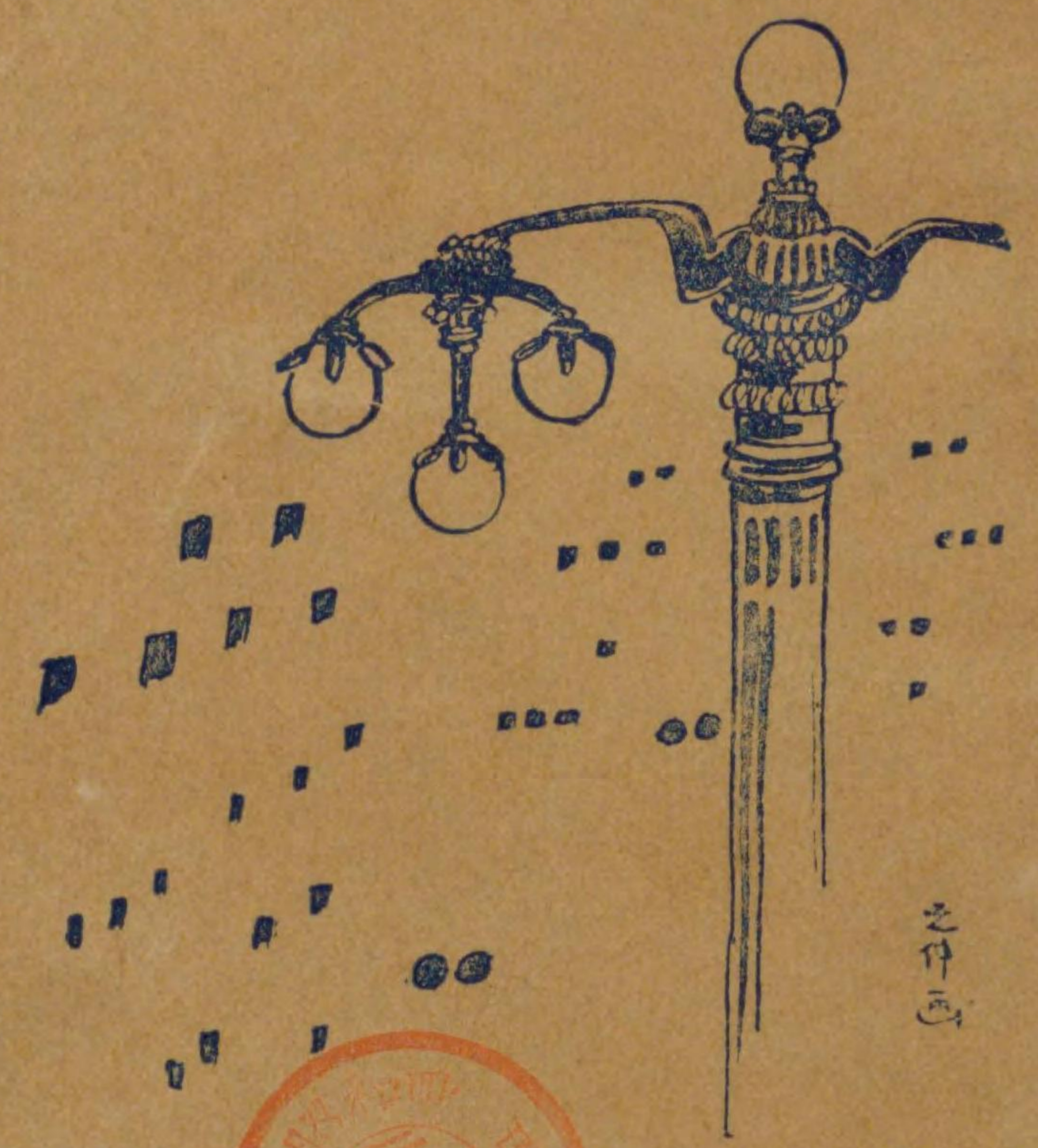


25 814

22569
の

ハシビロ 夜話

奥野多見男著



之印



5
B68-361

目次

あゝハルビンよ……………二

世界の樂天地

ロシア娘が呼んだ

一夜千金の歡樂郷……………二七

妙齡の魔性の者

肉感的な歌

裸踊り

カフェーの女……………三九

繪葉書店の祕密

女學生の女給

夜の公園……………五一

美人悉く集る
闇に囁くは?
處女の有無

秘 密 室 五九

頬のほてり
唇の誘惑

深夜の享樂 六八

特別室の男女
氣味悪き支那人

夜の一時二時頃 八五

娘の夜遊び歸り
闇を行く女

二人の世界 九六

彼女と公園へ

亡びたる國の風

快よき人々 一三六

床屋さん 一三五

美しき母娘 一四三

晩餐の招待 一五一

強烈なるウオツカ
異國情緒の悶え
豪華なる歡樂振り
美人を參觀

珍らしき話 一七七

夜の木蔭のベンチ
怖ろしき一夜

純ロシアの家庭 一三〇

132-530



ハルピン夜話

恍惚たる美女……………二三四
噂の活動寫眞
一代の豪華……………二三四
日本の藝者……………二七三
赤裸々の群れ……………二七九
雪を欺く肌の白さ
享樂の亂舞
甘き囁きの男女
左様なら……………二八九
録附大連まで……………二九二

あゝ、ハルピンよ

おゝ何んといふ華かな気分であらう、おゝ何んといふ明るい晴やかな気分であらう。私は此のハルピンが嬉しゆてならぬ。胸がピョンピョン匆ねあがる、血がワク／＼躍つて来る。美しきかなハルピン。ハルピンは歌つてゐる、輝いてゐる、實に東洋の樂天地!!

街から街へと、微笑みを雙頬に浮かべながら、いとも快活に、楽しく歩み行くあの多くのロシア娘は何んといふ私には嬉しい感激であらう!!

日本より一步も外へ出なかつた私には總ゆる物に飛び付いて見たい程うれしい。異常なる興奮よ、高らかなる音楽よ。

いでや、私は今それを書き出して行かう。

*

*

*

*

*

滿洲沿線を講演して歩いた私は炭坑で有名な撫順にも立寄つた。その時同郷出身の人達が私の爲めに歓迎會を開いて呉れた。その時勝木君と云ふ其の昔、僕とベースボールで鎗を削つて争ふた知合がゐた。勝木君は僕に『ハルピンへも行きませんか』と訊くから、『そりや勿論』と、答へると、それぢやハルピンには知つた人がありますかと更に訊き、若し無かつたら良い人を紹介すると云ふ。

その人と云ふのは勝木君と同じ學校出身で、而かも同級生で、且つ又ロシア語の實に巧みな、おまけにハルピンには古くから住んでゐて、目下松浦商會の副支配人をしてゐる吉村三郎と云ふ人だと云ふ。

『それは願ふでもない人だ。實に知合がなくて困つてゐたんだから』と頼むと、『ぢや此處で早速紹介狀を書いて、直ぐ郵便で出さう』と、云ひながら、ヤマトホテルの一室で、彼は急いでペンを取上げてくれた。そしてポケットに藏ふが早い、後

で外へ出た時に投函するからと云つてくれたので、やれ嬉しやと、すつかり安心してゐた。

撫順から奉天へ、奉天から長春へ、長春からハルビンへ出發する時、單に吉村君宛て、「コンヤ九ジ ハンツク オクノ」と書いて電報を打つた。そして彼は既に勝木君の手紙を見て知つてゐるから大方ステーションへ出迎へて呉れるだらうと思ふてゐた。然し熟方も顔を知らぬので、どうしたら先方が僕を他見男さんであることを知り僕が又吉村君であることを知ることが出来るだらうかと案じたが、幸ひ汽車の中に矢張りハルビンへ行く日本人が一人ゐた、名を高瀬と云つた。高瀬君はハルビン在住の者だが、今度一寸用件の爲めに大連まで行つた歸りだと云ふことだつた。

私は其處で試みに訊いた。

『あなたは若しや松浦商會を存じませんか。』

『松浦商會？ えゝ存じてゐます。』

『その吉村と云ふ副支配人を存じませんか。』
すると彼は考へて、

『さア、どの人が何んと云ふ方が存じませんが、顔は大抵知つてゐます』と、云ふ。

そこで僕は云ふた。實は斯々だから、貴方の見知つた松浦商會の人が屹度吉村君に違ひないから其の人がゐたら知らして呉れませんかと云ふと、お易い御用ですと快よく承知して呉れたので、漸つと重荷を下ろした様な氣になつて、それからはずつかり落着いて了つて、隣に寝てゐる金髪娘は美人だ、君見たか見たかで大騒ぎ、今郵便箱みたいな口を開けてゐるよ。ホウ、ドレ〜と密つそり行つたり來たり。そのうち汽車が愈ハルビンに着いた。

と、同時に怖ろしい許りの大きな團體のロシア人が七八人、どか〜と入つて來た。何の爲めに？ と呆氣に取られて見てゐると、それ等は所謂赤帽であつた。乗客は一人も降りないらしい、降りろと云はれるまでは降りて不可ないのらしい、だから自分

も其の儘たゞ窓から首を出してゐた。

すると、そのうち高瀬君が、『ゐる、ゐる、あすこに松浦商會の人がゐるよ』と云ふ。

『どこに?』

『あすこに?』と、指しながら、

『僕が一寸知らせて来るから』と、その儘下りて行つて、今指さした若き紳士に近付いて行つて、何やら云つた。すると、其の人は驚いて此方を振り向いたかと思ふと、つか／＼と僕の處へ近付いて來た。試みに『吉村君ですか』と訊くと、『左様です』と云ふ。

『撫順の勝木君から何か手紙がありました筈ですが』と、云ふと、『いゝや』とある。ハテ可笑しい、確かに勝木君は僕の眼の前で紹介状を書いて居た筈なのに、どうして出さなかつたらう、着かないものとするれば私から直接に電報を受取つた吉村君は何が何やらサツバリ解らなかつたらうと思ひながら、

『ぢや私の顔を御存じでせうか』と、訊いた。

『いゝえ存じません。』

『そうですか、私は昔ベースボールだの演説だったので、随分活躍しましたから、大抵の人は知つてる筈ですが』と、云ひつゝ、今度は名刺を出して、

『こんな者です』と、云ふた。すると吉村君呀つとして、

『やアお名前は疾くから、やア他見男さんですか。實は或は左様ではないかとも思ふてゐるたんです。電報には單にオクノとありましたので。心當りがないので、色々と私の店の人にも訊いたんです。すると誰かど若しや近頃新聞に出てゐる奥野他見男さんぢやないかと云ひました、さア名丈けは知つてゐるが逢つたことも見たこともない人だから、まるつきり知らぬ僕に突然電報を寄越すなど云ふこともあるまいと云ひつゝも或は若しやと思ふてゐました。矢つ張り左様でしたか。よくこそ』と、始めて快然。そのうち、乗客が降り出した。

『もういゝんでせうか』と、訊くと、

『よさ相ですね。』

『それぢや』と、僕は降りた。

ブラットホームを出ると、吉村君は『宿が定まつてゐるんですか?』と、訊く。

『いゝや、北満ホテルにでもしやうかと思ふてます』と、答へると、

『北満ホテル?』と、小首を傾けながら、

『一層私の商會にお泊りになつたら何うです? 何もお構ひは出来ませんが』とある。

『さア——』と、流石に初對面の人に『え』と直ちに答へることが出来なかつた。然し實際云ふたら左様して貰ふ方が萬事につけて、どれ丈け便利かも知れなかつた。

『では兎に角一應あなたの商會へ行つた上で、考へることに致しませう』と、答へた。それではと吉村君は馬車を呼んだ。大きいロシア人の馬車と支那人の馬車とが競争し

て急いで駆け付けて来た。我々はロシア人の方を選んで乗つた。馬車は吉村君の命ずる方へと走つた。

あゝハルビンへ来たのだ、ハルビンの街へ入つて行くのだと思ふと、全身は嬉しさに昂奮し、胸は喜びに燃えてゐた。馬車は暫らく薄暗いと云ふよりも寧ろ闇の中を走つた。オヤ／＼ハルビンと云ふ所はこんなに暗い所か知らと思ひながらゆられてゐると、そのうち次第に光に近付いて来た。

何よりも然し驚いたのが道路の悪いことだ、恰も走つてゐる馬に乗つてゐる様にボンボン尻があがる、あがる許りか左に揺れ、右に揺れる、呆然してゐると放り出され相になる。これには閉口して了つた。どうして此様に道路が悪いのか知ら、と試みに覗いて見ると、恰度人間の頭ほどある石が唯敷き並べられてあるに過ぎないのだつた。屹度道路の下工事が其の儘になつてゐるのに違ひない。

『さて吉村君。』

『えい。』

『實は我々はハルピンに滞在の豫定が三日間しかないんです。我々はハルピンは世界の樂天地と聽いて來たんです、ですから一分でも一時間でも無駄に過すのが惜しい様でならない。そこで早速荷物をあなたの店に置いたら、音に名高いパレルムの歡樂境へ出かけたと思ひますから、どうか御案内を』と、切り出した。

『今日はお疲れでせうから、明日にでもなすつたら。』

『いや、どうして、どうして。疲れるどころか、ハルピンと聞いた丈けでも胸の中が躍り出しますよ。何んだか話に聞いたんですが、パレルムへ遊びに行くのはいいが、歸りが危険だと云ふことですが、本當ですか？』

『危険とは？』

『十二時過ぎに一人で歸つたりしやうものなら、ドンと短銃で打たれると云ふぢやありませんか。』

街かう街へと微笑み
雙頬に浮田せまめ
いとも快活に樂しく
歩み行くあの夕ぐれ
ロシア娘は何んと云い
私には情しい感激であらう
日々ぶらり一歩も外へ
私には思ひ物
龍じつりてねんい程も小さい
異空やな。奥鹿田が
高らやな。音楽よ





「誰がそんな馬鹿なことを聞かされたか、随分おどかされたものですね」と、吉村君は、真顔になつて僕が聞いた丈けに、ヨリ多くブツと噴き出して、

「それぢや何處へだつて行かれませんかよ、ハルピンの眞のハルピンたる情緒は夜の十二時からですよ。そんな危険があつたら誰も出ませんよ。まア〜御安心なさい、私は此處に九年も居ますから」と、云ふ。

馬車は明るい街へと入つて行つた。もう其處からは暖にも日本人の姿が見られなかつた。美しく着飾つたロシアの娘、夫人、紳士が三々伍々樂しげに快活に散歩してゐる。店と云ひ、すべての裝飾と云ひ、すつかり異國情緒だ。

「なる程、これがロシア気分か」と、物珍らし氣に右を見、左を見てゐると、突然街にあるペンチに腰かけてゐた三人の美しい娘たちが、僕等の姿を見ると、慌てゝ立上つて、小手を高くかざして、盛んに小招いた。

「君の知つた娘？」と、試みに吉村君に訊くと、

『いゝや』と、首を振る。

『ぢや、あれが所謂魔性の女ですね。』

『まあ左様です』と、別に珍らしくないと許り知らん顔してゐる。此方は生れて始めて、外人の娘から斯う云ふ具合に小手招きされたものだから、嬉しくて、嬉しくて、馬車から半身乗り出して後を振向くと、娘たちの方では意ありと見てとつてか益々盛んに招んだ。見るからに美しい十七八揃ひだつた。

『あゝ素敵だ、實に素敵だ、成程ハルピンだわい、成程異國情緒だわい』と、すつかり悦に入つて、胸ますく躍る。その内馬車は最も繁華な街の中央へ来たかと思ふとピタリと止まつた。と吉村君はヒラリと下りたから、續いて僕も下りた。

『お店は?』と訊くと、

『此處です』と、指さす。

『え、此處ですか、へえ?』と、己れは驚いて了つた。雲突く許りの大厦高樓である。

云はゞハルピンの三越である。

『あなたの店は此處に大きいんですか、ウーム』と、失禮な云分ながら思はずさう云つて了つた。

『立派ですねー』と見上げ見下ろしながら、

『あなたは此處の副支配人ですか、豪いものですねえ。』

『いや何う致しまして』と、流石に眼の前で賞められたものだから、氣極りが悪かつたのか頭を抱えて了つた。

『まあ兎に角入りませう』と、云ふ。そしてズン／＼先きに立つて裏門へ來ながら、戸を裂しく力をこめて叩いた。誰だか開けてくれる氣配がしたかと思ふと、果して開いた。

一階、二階、三階、四階とズン／＼階段をあがつて、六階に來た。見れば大臣の應接室の様な構へだ。

『やア立派だ、すてきだ』と、又しても驚かされて了つた。

撫順の勝木君は自分の同窓のなかで吉村君が一番の成功者だと云ふてゐた。その時僕は思ふた。いくら成功者であつても、勝木君と同窓ならまだ年があまりに若過ぎる。だから云はゞそのあたりの成功者だらうと推してゐた。所が此の大建築の副支配人は、いみじくもでかしたものだ。確かに我々の遙かに想像以上のものであつた。然かも我々と同郷であると云ふことは、何んと云ふ喜ばしいことであらう、己れも心から嬉しくてならなかつた。同郷であると云ふことよりも、寧ろハルピンに於て群を壓する此の大建築の副支配人が、斯くの如き年若き日本人に依つて占められてゐることは如何にも頼もしく、又威勢よく、そして心強いことであつたからだ。

あたゝかい紅茶が運ばれた。續いて若い美しい奥様が出て來た。

『私の妻です』と、吉村君は紹介した。きけば矢つ張り私共と同じく金澤生れだといふ。そして私の本の特に愛讀者であつたと云ひ、どんな人か一度お目にかゝつて見た

かつたといひ、お國の人と云へば一しほ懐しゆ御座いますとも云つて、此の旅の人の心に安堵と、喜びを與へてくれた。

一言三言話してゐると突然ザツと云ふ音がした、雨だ。やがて風も加はつたらしく、物凄くうなつて窓を打つた。下を覗いて街を見ると、人が走る、逃げる。やがて其れも途絶えて、風雨は益々暴威を振ふばかり。

『これぢや迎ても出られませんねえ——』と、吉村君が云つた時には、己れはガツカリして物も云へなかつた。貴重なる一秒一分も風雨の前には何うすることも出来なかつた。私は楽しみに楽しんで來た、そして憧憬れにあこがれて來たハルピンの最初の一夜がこの雨の爲めに妨げられたことを何んとも云へぬほど呪はしく思ふた。そして失望と悲觀に氣拔けした様になつて、黙つて窓に打つ雨の有様を恨めし氣に見詰めてゐた。

その様を見て吉村君は氣の毒に思ふたのか、

『この雨ならすぐ止むでせう』と、慰めた。

『止ませうか』と、一縷の望みを得たかの様に訊き返へして、ヂツと顔を見た。

『驟雨らしいですから止ませう、時々突發的に此處雨があらんですよ、所謂大陸的
とでも申しませうか』と、微に笑つた。

止めばいゝ、早く止んで呉れゝばいゝと、それ許り氣にして居ると、臆て、さしも
猛烈な勢で降り灑いでゐたのが、急に小止みになつた、その小止みも又遂に止んで了
つた。

漸つとヤレ／＼と許り己れは息を吹き返した。

『こんな雨のあとですから、パレルムは今夜は淋しいでせうよ。それでも出掛ますか』
と、吉村君は訊く。

『えゝ兎に角、早くハルピンの眞髓を覗き知りたいたい様な氣がしますから。』

『左様ですか、それなら』と、無理に意を決して、

『では其の道の通で日本人よりも日本語の上手な露西亞人を一人案内させませう』と
云ひながら部屋から出て行つた。間もなく一人の露西亞人が一緒に入つて來た、吉村
君はロシア語で何やら云ふた、ロシア人は親しみのある笑顔で其れを聽いて頷づいて
居た。そして『ようこそ』と流暢な日本語で私に挨拶した、私は『どうぞ宜しく』と
首を下けた。生憎雙方の間に大きな机があつたので、握手するにも出來なかつたのが
遺憾であつた。

『それでは』と、一同立上つた。

一夜千金の歡樂郷

パレルムは松浦商會よりは存外近かつた。入場料五十錢を拂つて入る。こんな大雨
の夜だつたから、さぞかし人は殆んど居るまいと思ひきや一杯だつた。歡樂郷に雨は

應へぬものと見える。

入つて一町ばかり進んで行くと、椅子席に人がギツシリだ。見ると正面では今盛んに芝居をやつてゐるんだつた。

観客は右を見ても左を見ても、ロシア人ばかり、日本人は何處にもゐない。どこかに日本人がゐたらと其れを期待しつゝ後の方で、熱心に物色してゐると、恰度座の中央部あたりの所に黒い髪が二つ見える、キモノが見える、日本の女だ。

オヤあすここに？と思ふてゐると、通譯のロシア人——私は今後Nと假名しておく——Nが彼の隣の椅子が空いてゐるから、あすこへ行つて坐らうと云ふた。それでは一同進んで行く。デロ／＼と四邊の人が我々を見た。椅子に坐つて、密つと四邊を見た。いづれもみな美しい男女連れだ。女一人もあつた。

『魔性の女は何處に？』と、試みに訊くと、Nはヂツと眸を凝らして、

『あすここに、向ふの隅に』と、指摘した。それ等は何れも立派な令嬢の姿をしてゐた。『何うして其れが解るのか』と、訊くと、Nは「そりや、経験さ」と云はん許りに唯笑つて見せた。

ふと己れの視線は隣りにゐる日本の女に外れた。扮装が事務員らしかつた、彼女等は懐し相に、笑みたい様な笑みたくない様な顔をして、矢つ張り時々折にふれ此方を見た。ロシア人夫婦に連れられて、來てゐるらしかつた。時々そつと耳打ちなどして話合つてゐた。

芝居は喜劇だつたらしい、時々ドツと客は笑ひ崩れた。言葉が少つとも解らぬから己れは知らん顔してゐたかつたけれど、みんなが笑ふに連れて、自分も矢つ張り少し笑つて見たい様な氣がして笑つて見せた。

吉村君はクツ／＼笑ひこけた、どんな難かしいロシア語でも分らぬことがないと云ふんだから、しめたものだ。一幕が下りてからポカンとしてゐる僕に芝居の筋を説明

四五人の
象牙の細工の
物な美人の
群や舞台へ
ドット出て来た
珍藝の物々々
見せつけた
これこそが
これこそが
これこそが

之伸画

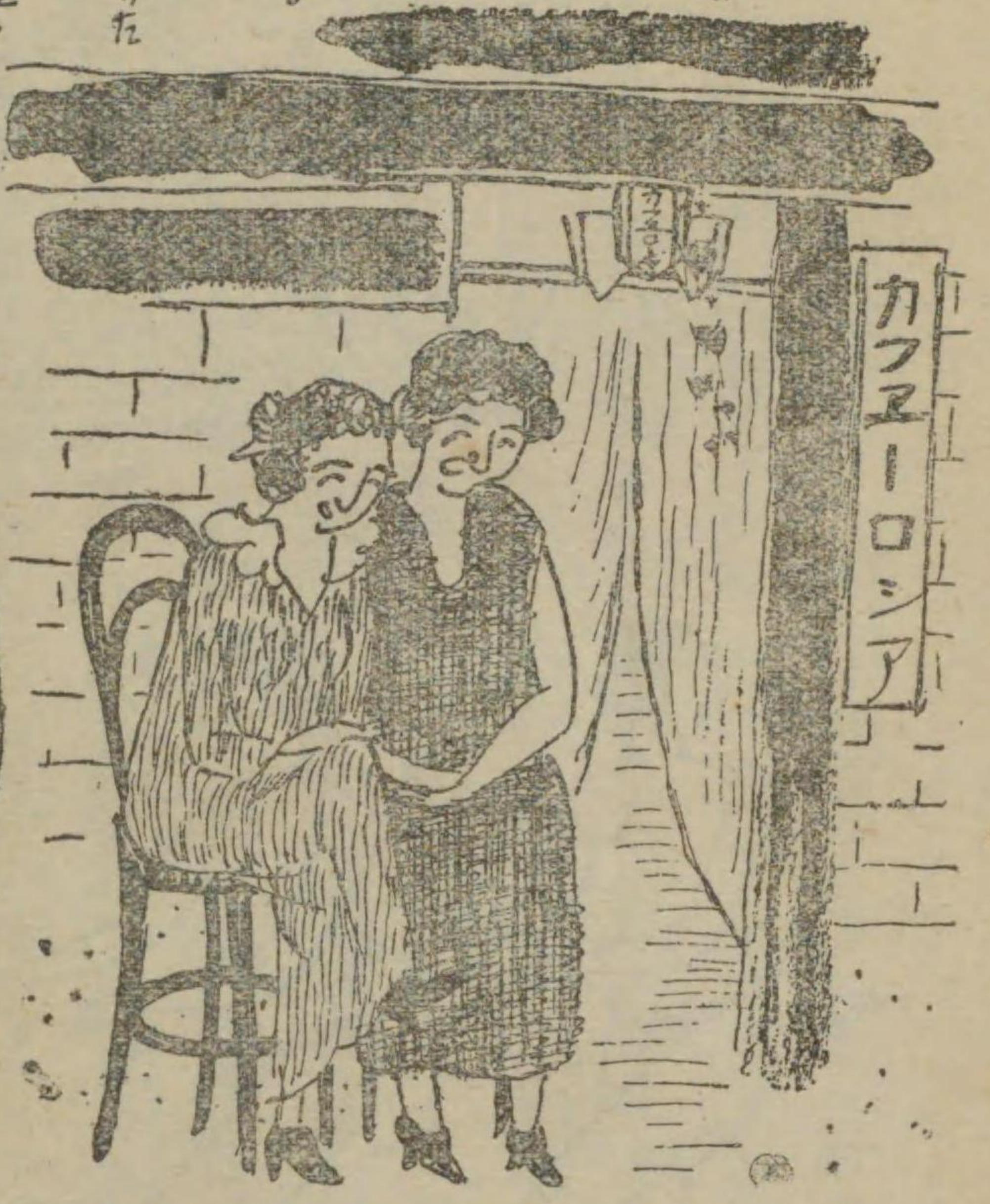


した。

カフエーに一人の女給がゐた。禿頭の親父がそれに夢中になつた。所が其の親父の息子も矢つ張り其の女に夢中だつた。女は遂に孕んだ。そして其の罪を親父に歸した。親父は己れでない筈だがと頻りに小首を傾けた、「どうしても其の頃覚えがない」と云ふ。そこで女給は仕方なく其れではと息子に當つて見た。所が息子もハテ存ぜぬ知らぬと云ふ。いづれも其麼ことを云ふので、遂には旦那と云ふのは貴方ばかりと喜ばせてゐたのが遣り切れなくなり、實は八人あると白状し、その八人を召集して、何んとか相談會を開いて善後策を講じて貰ひたいと女給が折れて出た。えッ八人？ えッ八人と各々天つ晴れ天下の色男は己れ一人と云ふ連中が吃驚仰天した。とにかく一時は愛撫した覚えがあるからと云ふので、いつ何日に其のカフエーへ集まれと云ふ發起人から手紙が来た。親父と息子は各々うまいことを云ふて家を出た。所が測らずも此のカフエーへ来て、親父は息子を見付け、息子は親父を見付けたの

カフエーの
前
二人の
ロシア
椅子に
かけておん。
そこを
先刻通った
時に
あなたに
方で笑って

之仲画



見せたら私共も
きつと笑って見せ
の云ふ眼で
ザッ此方にも
あんなので試み
笑顔を作つて
試験して見た所
果してニツと笑んを
ごちも優しい
眼えな

で、驚きやら、悲観やら。

『お父さん、あなたは何んの爲めに此所へ来たのです？』

『萬止むを得んことがあつたので。シテお前は又何んの爲めに来たのだ。』

『私とても矢つ張り萬止むを得ぬことがあつたので。』

そのうち時間が来たので、發起人は『では皆さん此處へお坐り下さい』と云ひなが

ら、その女給のボンと脹れた姿を前において、

『さて諸君、御覧の通り彼女のお腹に半圓球が描かれて居ります。抑々これを描いた

人は此のうちの誰方でせうか』と、見廻はす。さア俺ではない、君だろ、あれだろと

云つてる裡に雙方の隅と隅とに小さくなつてゐた親父と息子とがピタリと顔を合す。

『オヤお前も此の仲間か。』

『やアお父さんもか、分らんもんだなア！』

『どツ、どつちが分らんもんだい』と、二人とも大にペソを搔く。

協議の結果、互に互譲の精神に基き、この女に子育料として、毎年一千留を送ること

とを可決して、息子は『お父さんつたら、實にみかけによらん』と云ふて入る。

父親は『あの子供は女給を孕ます可く生長したのか知らん』と咳く、そして『實に怪しからん生長の仕方をしたものだ』と憤慨する様、面白可笑しくあつて幕だつたんだと云ふ。

◎

時計を見ると十二時に十五分前だ。

『十二時からが、所謂パレルムの歡樂の歡樂郷たる世界が展開されるのです、もう十五分お待ち下さい』と、Nは云ふ。

芝居が終ると、前庭の廣場の音樂堂で、或は爽快な或は優艶な音樂の音が耳に楽しく傳へられて來た。人々は雨が小ぶりに降つてゐたので、庭へ集まることが出来なかつた。その椅子にかけたまゝの者もあれば、隅の方に立つてゐるもの或は客席と客席

との間を縫ふもの、中には眞面目な夫婦者らしいのは芝居が終ると共に歸つて行つて了つた。

己れは仲間を其の儘にして、音樂の音を慕ふ様に立上つて行つて見た。そして舞踏の曲に至ると、そつと足を動かして見たりしてゐた。その裡十二時になつた。

十二時を打つと同時に、人々はドヤ／＼と立上つて、傍に並び立つ建築の中へと入つた。我々も續いた。

そこは矢つ張りカフェーであつた。正面には舞臺があり、舞臺の下は音樂で占められてゐた。云はゞ帝劇を小さくした様なもので、たゞあの椅子席がカフェーに變つてゐるものと思へばいゝ。二階もあつた、二階と正面の兩側は特別席であつた、所謂一等席である。

最初我々は階下の一隅に席をしめた。するとNは密つと耳打ちして、『若し美人を見たけりや二階から見下ろすに限りませすよ』と、云つた。

それでは二階へ行かうと、二階へ上がった。隣の客席と隣の客席とはお互に見えぬ様にチャンと板で敷られてあつた。云はど一組一組づゝに分たれてあつた。

ボーイは支那人だつた。吉村君はロシア語で何やら云つた。いゝ場所へ案内しろと云ふたらしい、恰度中央の座席へ導いてくれた。

坐ると同時に、「何か御注文は？」と、訊いたらしい、吉村君は答へた。すると程もなく見たこともない料理——所謂ロシア料理をそれからそれへと運んで来た、酒も持つて来た、僕はハラ／＼した。

何故ハラ／＼したかと云ふと、或る友人から、パレルムへ行つて決して料理や酒を注文しては不可ない、何百圓と暴利れてヒドい目に逢つたものが澤山ある、パレルムと云ふ所は一夜千金を惜しまぬ覺悟で行かなくちや飛んでもない目に遭ふ所だ、この點だけは呉れ／＼も忠告しておくぞと、親切に云つて呉れたものだつた、そして酒には一本何十圓するのがあるの、中には何百圓のもあるのと脅されてゐた。

又單に此の友人の言葉のみでなく、よく歐米の紀行文を讀んだり、又は洋行歸りに聽くと、フランスなんかでも、これは旅の者だと思ふと、しめたと許り、盛んにあれこれと持つて来て財布の底を叩かさなくちや承知せぬと云ふ。現に今を時めく某顯官なども其の手でドエライ目に逢つたと云ふ。だから兎も角も其處場所へ行つたら知らぬ要らぬで通せと云ふ。小さいコップに一杯が五圓だぞ、十圓だぞと、念には念を入れてゐたことを覚えてゐる。

それがピツタリ思ひ出された。そしてコリヤ屹度何百圓だぞ、こんなに注文して後でジタバタしなくちやならぬ羽目におちいつたらと一皿ふへる毎に『そら何十圓』と、氣が氣でなかつた。

然し吉村君もNも泰然として杯を擧げてゐる。己れも仕方なしに泰然として了つた。階下を見ると、男もゐるが大抵女ばかりだ、その女も妙齡ばかりだ、而かも美人、而かも殆んど魔性のものばかりである。

オヤあの肉ゆたかな女がソラ眼で呼んでゐる。オヤ此方の隅のすらりとした金髪が小指と首で己れを招いてゐる。

オヤ又あつちにも、オヤむかうの隅からも眸を放つ。方々から必ずロシア娘は眼で合圖したり知らせたりした。何んだか嬉しくなつて思はずニヤリとすると、偕は私にこそ思召しのあるなれと懸命になつて、あらん限りの秋波の術を見せた。東洋の君子大に動揺して、そして何んと云ふ面白い場面だらう、成程ハルビンだわい、同じ満洲でも一歩ハルビンへ入ると、斯うも天地が變はるものか、自由が許されてゐるのかと驚かされて了つた。巡查などは一人も居らぬ、魔性のものゝ横行濶歩の天地である。

やアあの女は素敵だなア！物を云ふて見たいな！やア！此方のも素敵だなア！ウヒツ笑つて見せたぞ、イヒツ此方も返禮して笑つて見せるぞウワハ、ウワハ。

そのうちに正面の幕が開いた。音楽に合せてロシアの俗謡を面白く歌つて見せた、何んの意か例に依つて分らなかつたけど、餘ッ程肉感的の歌らしかつた、人々は顔を

赤らめて笑つた。續いて舞踏があつた、ロシアの色彩の濃いものであつた。

幕が下りると、今度は観客の爲めに、ダンスの曲が奏でられた。すると椅子に座つてゐたもので、其の心得のあるものは客席と客席の間を踊り廻つた。見てゐると餘り上手ぢやない、僕の方が餘ッ程うまいと思ふた。さう思ふたから、己れは恰度踊つてゐる連中の中の青い絹を着たスラリとした色の殊に白い女が優れて其の中で身體が輕相に見えたから、一つあの女を相手にして踊つて見たいなと思ふて、試みにNに

『この次の時あの女と踊れないだらうか』と、訊いて見た。

『えゝ構ひませんとも』と、たやすく答へる。

『でも誰か紹介してくれなくちや。』

『紹介なしでも此處では相手に申込めばいゝんですよ』と、云ふ。

『その申込む言葉を知らないんだから』と、云ふと、それではと、Nは笑ひながらポロイを呼んだ、ポロイから支配人に又何か傳へられたらしい。すると其の支配人はツ

かくと其の女の所へ云つて何か云ふた。女は同時に階上を仰いで我々の顔を見た。そこで己れは其れを申込んだのは僕だぞと知らず爲めに殊更に優しい笑みをニツと形造つて、『ね』と云つた様な表情を巧みにして見せた。すると女は解つたと見えて、マネーヂヤに何か答へたらしい。マネーヂヤからボーイへ、ボーイから僕へ其の返事が来た、それは『いゝことよ』だつた。そして彼女はフランス人であると云ふことを序に知らせた。

次の芝居の後、ダンスの曲が鳴つた。僕はフォクストロートを踊りたかつたのだが生憎ワンスステップだつた。ワンスステップや平凡だと思ふたけど、構ふもンかと許り立上つて急いで階段を下りて行つて、其の女に一禮した。女は立上つた。二人は組んだ。己れは衆人にこれ見よやと許り踊つて見せた。驚いたのは一般の客である、今まで日本人で此パレルムで踊つたものがないと云ふ、否凡そ眼玉の黒いものが飛び出したことがないと云ふ。だから僕が飛び出したことは彼等には大なる驚異であり、好奇

であつたことに違ひない、それだから彼等は自分たちの踊ることを忘れてヂツと眼を灑いでゐた。僕の外にやつと一組しか踊らなかつたことが如何にも其のことを證明して餘りあつた。

彼等は頻りに囁き、中には或る者は聲をあけ、或る者は又半ば腰を浮ばせて見入つた。

更に彼等よりも驚いたのは先刻の二人の日本娘たちである。かれ等も矢つ張り先方の芝居が済んでから、この場所へ入つて来て、階下の中央部に坐を占めてゐた。時々上を仰ぎ見れば僕等の一行を注意してゐたんだ。

所が僕が今斯うして踊り出したものだから、仰天して思はず眼をパツチリみはつたのみならず何んとなしに彼等つまりロシア人のみの天下であると思ふてゐる所へ、いきなり日本人こゝにありと許り僕が躍り出で、衆に秀れた鮮かなステップを見せて日本人の爲めに萬丈の氣焔を吐いたんだから堪らない、急にすほめてゐた肩をのびの

びさせて、カラ／＼と大きな笑顔を見せた。

ダンスの曲が終ると人々は待つてゐたかの様に百雷の落つる様な拍手を浴せた。中には突然横合から大きな手をヌツと伸して、己れと握手するが早いカグン／＼振つて呉れたものもある。頻りに何やら云ふたけど、己れは解らないから唯好意ある笑みの下に軽く首を下けて酬いた。

二階の席へ戻つて來ると、

「我々の爲めに國威を輝かして呉れた、あんな上手いのを見せ付けられては、ロシア人は今更踊り難いだらうて。あゝ嬉しい實に嬉しい、さア矢でも鐵砲でも持つて來いと、祝杯を上げて呉れた。

先刻まで二階にこんな日本人がゐると云ふことを知らなかつた連中は今更の様に驚いて下から見上げた。そしては何か囁いた。得意正に満面である。魔性の者共は斯うした僕の特別の技能を見せつけられるに及んで、何んだか頼もしくなつたのか、秋波

は翕然として集中した。中には我々みたいな者は迎ても駄目だわと自分の縹緞を自覺して競争を棄權したものもあつた。

其の次の時に私は又そのフランス美人と踊つた。喝采益々音高いばかり。外の多くのロシアのダンサーは全く壓倒されたかの如く、容易に踊り出なかつた、痛快の限りとは實に此のことを云ふ。

◎

次の幕に己れは驚く可きものを見た。それは裸體踊りである。四五人の象牙の細工の様な美人の群れが、舞臺へドツと出て來た。そして茲に筆にすべからざる珍藝の様を見せ付けた。これでもか、これでもかと云ふ、所謂道學者に見せたら思はず眼を蓋ふものばかり。

然し腰部には僅かに布を纏ふてゐた、以前は全々眞の裸體だつた相だけど、ロシアが國亡びると同時に、このハルピンにゐる支那人が威張り出し、同時に此麼さまを見

せ付けられては、妬けてく堪らず、遂に支那の警察が風俗を紊すものだと問題にした爲め、布を巻く様になつたものと云ふ。

序だから書くが、ロシア人はそれは支那人を忌がつてゐる、何故かと云ふと、今までで弱國であつた癡に、ロシアが亡びて、ロシア人の個人勢力がなくなると、今まで自分達が虐けられてた遙か以上にロシア人にむごたらしく當ると云ふ。それがロシア人が癪に障るらしい、今に見ろと思ふてゐるらしい、おまけに支那人の不潔さにホトホトあきれ返り、あんな者共に首を壓へられるとは、如何に國があゝなつたとは云へとウームと齒を喰ひ縛つてゐると云ふ。

其の反對に日本人に對してはロシア人は非常な好意を表してゐるとのことだ。日本人は何處までも威張り散らかしたりしないで、どことなく親切であり、又をだやかであり、紳士的だと思ひ込んでゐるとのことだ、そのことは其の後私が見聞した所全くその通りに違ひなかつた。

ハルビンと云へば、警察權は日本と支那とロシアの三つで握つてゐる。市中では大概支那の巡查が立つてゐる。

話はツイ横道へ外れたが眞の裸體姿が斯う云ふ風にして止められたことは聊かハルビン情緒を傷けるが、考へ様に依つては寧ろ僅か布を巻いた方が、却つて想像力を逞うせしめて、神祕的でいゝかも知れない。敢て負け惜しみではないが、我々は現實曝露の悲哀よりも寧ろ此の方を贊成する。何故ならばお宮の御神體にしるだ、白晝これが御神體で御座いと晒け出されて、オヤ／＼此處の毎に拍手を續けてゐたのかと今更の様に幻滅を感じるよりも、寧ろ幾百年と扉を開かない方が、神祕的であり、有難味の深いと同じい様に。

◎
その次の幕合の時間は可成永かつた、のみならず音楽は休憩をするんだらう、樂手は皆引込んで了つた。

その時に、己れは先刻己れと一緒に踊つてくれたフランス美人をさし招いて見た。すると彼女はニツと笑んで階下から立上つて遣つて來た。外に一人のロシア女も一緒に隨いて來た。

僕等は喜び迎へた。そして座席を詰めた。

「先刻は有難う」と、己れは云ふた。

「いゝえ、私こそ、逆でもお上手だわ、どこで御稽古なすつたの、アメリカで？」

「いゝえ日本で。」

「日本でダンスを？　へーえ」と、みはつて、

「日本にダンスがありますか。」

「ありますとも、今では大概の人は踊りますよ」と、聊か吹き立てると、

「さう」と云ひながら「今晚はおかけで大變愉快でしたわ」と、流石に交際馴れたものだ。

「何か召上らない？　葡萄酒？　ウオツカ？」

「さアー」と、考へて、

「アイスクリームが頂きたいわ、あなたは？」と、連れの女を見た。

「ぢやわたしも」と、ロシア女が答へた。ボーイが呼ばれた、アイスクリームが注文された。程なく持つて來た。

「あなたはハルビン？」

「いゝや東京から、日本の。」

「さう」と、東京を知つてゐたらしかつたから、

「行きたかない？」

「行つて見たいんですけど、遠いでせう？」

「そりや可成遠い。」

「ぢや駄目ね。」

『いゝ所ですよ。』

『警察が厳しいでせう？』

『そりや日本のお巡査さんは同情がない、眼玉が此の皿の様になる』と、云つたら二人は聲をあけて笑つた。

その時下からフランス美人の友達らしい女が頻りに呼んだので、彼女は『又来てよ』と云ひながら立ち上つて行つて了つた。残つたのはロシア女一人になつた。ロシア獨特の色彩ある洋服を着てゐた。肉たつぷりな眼の美しい女だつた。

同行の眞山君は、ポケットから寫生帳を出して、

『暫らく動かずに』と、云ひながら、サラ／＼と寫生を始めた、彼女は正直にデツとかまへた。

『もういゝよ』と、程もなく眞山君は筆をおいた。見ると早くも二ツの顔が描かれてあつた。一方は思ひ切り美人に、一方は本人酷似だつた。

『一寸見せて下さい』と、ロシア女は畫帳を取上げて見た。

『この方が上手よ、こつちは駄目』と、自分に酷似の方をけなし、美人に描かれた云はど彼女に似ない方を上手だと賞めた。眞山君は日本語で、『云はど自分の顔をけなし
てゐる様なものだ！』

我々の横へ此處女が來たので、今は秋波を送つても望みなしと思ふたのか、階下に
ゐる多くの魔性共は、すつかり諦めて再び僕等の方を見なかつた、そして今度は他の
男の客の方へむけ盛んに媚を進上してゐた。そのうち成功すると、その男のゐる所へ
出かけて行つて、共に飲み、共に喰らひ、聽て手を抱えて外へと消えて了ふ、そう云
ふ組が可成あつた。云はど其れを目的に女が來てゐるんだ。

最後に如何に方法を盡しても男が網に引つかゝらないと、しよんほりと一人で歸つ
て行く。あんまりいゝ氣持ちでないらしいけど、相手にして呉れる男がるなけりや仕
方がないと見ねばなるまい。

中には又外から連れ込みで來てゐるものがある。二人限りで、特別席でヒソ／＼と話してゐる様、如何にも嬉し相だ、そして其處連れ込みは男が自慢して連れて來た丈けあつて皆美人だ。

僕には向ふ階下の特別席にゐた緋色の帽子を被つた眞紅の衣をつけた細面の美人の姿が今でもチラついてならない。彼女は時々己れを見上げて呉れた。その時有難いと思つた。しめ／＼とも思ふた。然し傍に男がゐることが千秋の恨事だつた。ハルピンへ來て詩吟でもあるまいが流星、光底、長蛇を逸すぢやて。

三時を打つた上に、疲れた故か精神がうつとりとして來た。それでは歸らうと一同立上つた。

外へ出ると、幾十と云ふ馬車が、こんな天氣なのにも係はらず客を待つてゐた。僕等は其の一臺に乗つた。

短銃のピの音もしない、至つて安全なものだ、誰だいなんなに脅し付けたのは。

カフェーの女

日はカーンとして枕元を照り付けてゐた、驚いて立上る。

顔を洗つて、食事を済ました所へ小柄ながらも見るからに丈夫相な、どつしりした一人の人物が入つて來た。吉村君は『この水上支配人です』と紹介した。

『やア』と立上つて、己れは昨夜からお邪魔さして頂いてゐますと云ひ、同時に何分よろしくとお願ひした。支配人は寧ろ我々の來宿を非常に喜んだ、そして何もお構ひは出來ぬが、出來る丈け長く滞在してハルピンをよく見て下さる様にと、それは叮嚀であつた。そして我々の爲めに一望全市を瞰下する最高樓の二室を開放して呉れた。その室は嘗に眺望が雄大であるのみならず、下を覗けば居ながらにして織るが如き人馬の往來を手に取るが如く見ることが出來た。

斯くの如き好位置、良場所は百萬金を出しても求め得られぬ所のものであつた、何たる喜びであらう、何たる感激であらう、我々は其の好意ある心盡しに何んと禮を云つていゝか解らなかつた。

馬車で滿鐵營業事務所を訪ねて其のかへりを少しくブラ〜と歩いて、街の様子を見た。先づ煙草の細巻を一つ買つて見た。喫んで見ると實にうまい、大體安いのに驚いて了つた。内地の四分の一位の價だ、煙草でも僕は淡泊した細巻の方が好きだ、兩切りは私には強すぎた。

私はロシアの煙草を喫んでツク〜日本の煙草の拙いと云ふことを知つた。高價いと云ふことも知つた。

繪葉書を賣る店へ入つて、面白いのがありますかと訊くと、面白いと云ふことを曲解して變なの許り取出した。こんな物を？と首を振ると、日本人の注文なされるのは大抵この種類ですと云ふ、腹が立つやら氣極りが悪いやらで飛び出して了つた。

滿鐵營業所から繪葉書店へ来るまでの間に一つのカフェーがあつた、そのカフェーの前に二人のロシア女が椅子にかけてゐた。そこを先刻通つた時に、貴方々の方で笑つて見せたら、私共も屹度笑つて見せるわと云ふ眼付きをデツと此方に灑いでゐたので、試みに笑顔を作つて試験して見た所、果してニツと笑んだ、どつちも優しい眼元だつた。

通り過ぎてから、なほ試みに振り返つて見た所、そのうちの一人だけはデツと振り返つて笑みを送つてゐた。

そんなことを何時しか忘れて繪葉書屋の前へ來たんだ。繪葉書屋を出てから、どつちへ行かうと、みんなで立ち止まつた。

「咽喉が乾いたからコーヒーでも飲まうか。」

「それがいゝ、然し同じ飲むなら美人のゐるカフェーへ行つて見たいナ。」

「この邊にあるか知ら」と、云ひながら吉村君はデツと四方を凝視した。然し一寸見

當らないらしい。

『ウンさうだ、今通つて来た道に女が二人ゐたでせう、あすこはカフェーです、あすこへ行つて飲ませうか』と、Nが云ふた、僕は一二もなく賛成した。

踵を廻らして戻り道した。場所は満鐵營業所の向ひ側、岡田寫眞器販賣營業所と福徳旅館の間に其のカフェーがあつた。確か字を英語讀みにするとカフェーポツシルと書いてあつた、ポツシルぢやないあれでカフェーロシアと讀むのだと吉村君が教へた。先刻の女が矢つ張り椅子に坐つてゐた、『オヤ又来てよ』と許り互に目で知らせ合つて、此方を見てニツと笑んだ。その傍へツカ〜と寄り、そのまゝスウと中へ入つたものだから、女たちは驚いて隨つて一緒に入つた。

一隅に腰をかけた。女は立つてゐたので、おかけなさいと云つたら直ぐかけた。お寄りなさいと云ふたら直ぐ又寄つて来た。彼女等はそして絶えず笑顔を見せてゐた。物に臆するなき快活振りが僕には嬉しかつた。

女の一人はゆたかに肥つてゐた。魅力ある眼を持つてゐた。一人は全て女學生みた
いだつた。眸は聰明に輝いてゐた。一は肉の女である、一は伶俐の女であつた。

私は伶俐の方を自分の傍へ寄せて共にコーヒを飲みながら訊いた。

『あなたの名は？』

『デナナ』と、女は答へた。

『デナナ？ さう』と、云ひながら、

『いつから此のカフェーへ来たの？』

『昨日から。』

『えッ昨日から、漸つと昨日から。ぢやそれまでは？』

『女學校へ通つてゐたの。』

『どうして此處所へ来たの？』

『學資は勿論、喰へることが出来なくなつたから。』

貴女は私を何う
 思っていますか
 どう思っていますか
 好きだと
 思いませんが



之伸画

『父は？ 母は？』

すると、今まで笑顔で話し、てゐた彼女は急に暗い顔して、聲を落しながら、
 『母は四月に亡くなりました。父は行衛不明になりました。私獨りほつちで、外に誰
 もゐないんです』と、云ふて太い吐息をしたかと思ふと、いきなりテーブルの上
 へ面を伏せてすゝり上げた。

己れは飛んだ質問をして濟まなかつたと思ふて、繰り返しく同情します、同情し
 ますと脊中を撫でた。そして『今更嘆いたとて追ひ付くものでなし』とも云ふた。

暫らくシク／＼泣いてゐた彼女は漸々首をもたげた。眼は眞赤になつてゐた。涙が
 その奥に満ちてゐた。

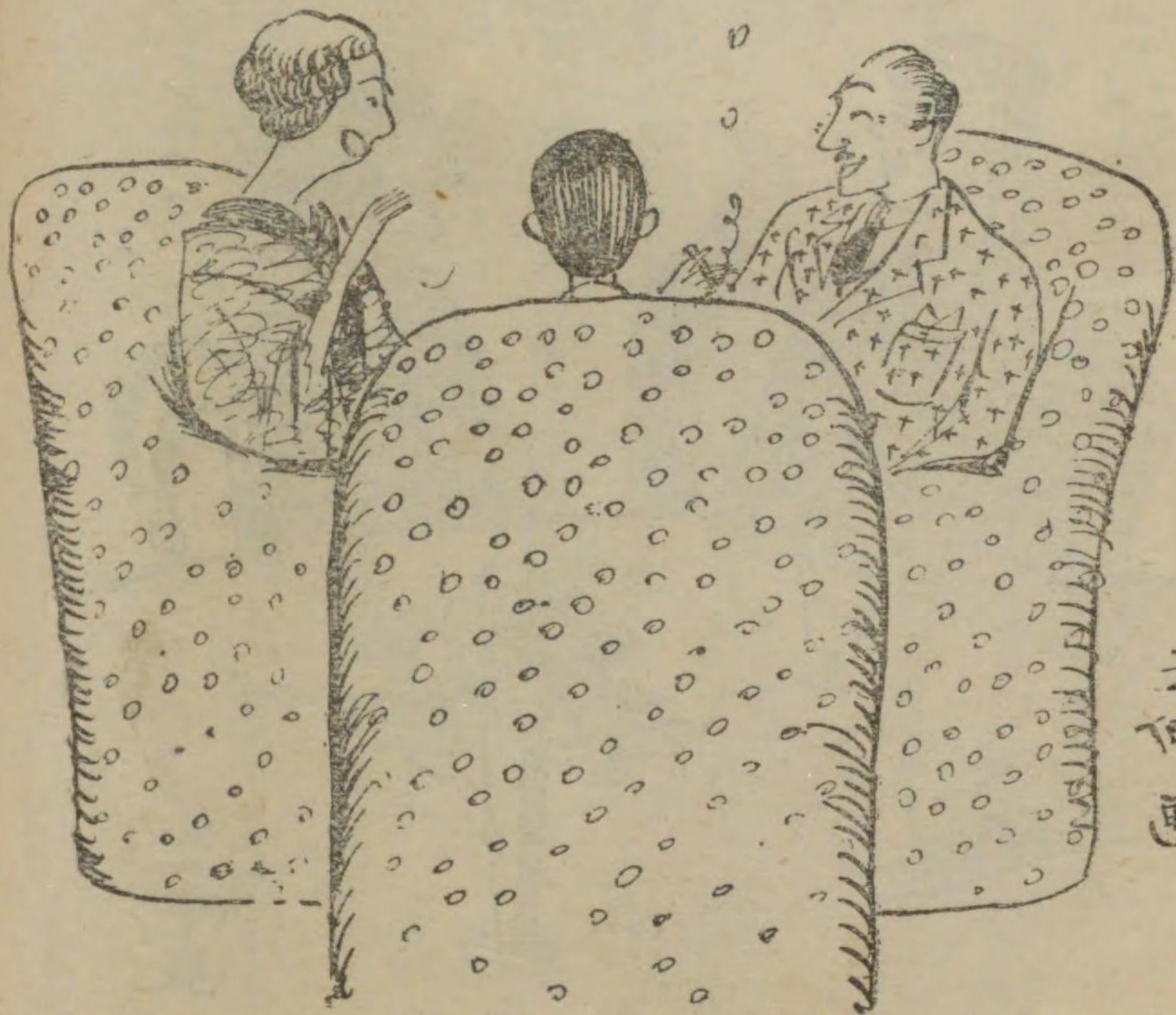
成程この様子では昨日このカフェーへ來たと云ふことは偽りのない言葉であらう、
 なんとなしに純であり、話することが所謂女學生そのものであつた。少つとも淫らで
 なかつた。小説がお好きですかと訊くと、『えゝ大好きです』と答へながら、

夫婦互に

見合せて

ニ...

笑、た。



之伸画

「貴方はロシアの人の書いた小説を読んだことがありますか」と、訊くから、
 「あるとも」と答へると、

「誰れのを讀みましたか?」と、覗くので、凡そ己れの知つてゐる限りのロシア小説家の名をみな列擧した。

「どうして其處に詳しいんでせう」と、彼女が首を傾むけると、横にゐた吉村君、

「この人は日本で有名な其の道の人だ」と、うまく云ふてくれた。すると彼女は驚いて、同時に尊敬の態度を見せて、

「道理で詳しい」と、感嘆しながら、

「私はドストイエフスキイのものが、たまらなく好きです、この頃も暇々にカラマーゾフ兄弟を繰返してゐるんですよ」と、云ふた。

今一人の女は此の女に比べたら全く低級だつた。所謂カフェーの女であつた。だから小説の話など出ると、沈黙してゐるより仕方がなかつた。

僕はポケットからノートを出して、こゝへ二人の名を書いてくれと云ひながら、最初にデннаに鉛筆を持たせた、デннаは書いた。次に一方の女に渡した、かの女も書いた。

取上げて見ると、デннаは流石は女學校教育を受けた程あつて、一方と比べて見ると格段の違ひがあつた。一方の字は全く餘りに見劣りされた。こんな字ぢや幾程美しい顔してゐても愛想が盡きるわいと思はず笑みを洩らすと、其の女は早くも其の字で自分と云ふものを觀破した様な笑ひ方だと思ふたのか、ヤケ半分の笑ひを淋しく口邊に漂はせた。

私はデннаに云ふた。

『貴女は私を何う思つてくれますか。』

『何う思ふツて？』

『好きだと思ひませんか。』

私はロシアの女は感情を淡泊に云ひ現はすだらうと信じた、そして少くも先刻からの僕に對する態度や様子や言語で、一二もなく好きだと答へるだらうと思ふた。イヤ好きと云ふ言葉よりも表現の上手なロシア女の特有として、相手を喜ばす手段として僕を熱愛する位なことは云ひかねないだらうと、ヂツと其の唇を見詰めてゐた。實際私は其れを期待しての質問であつた。

デннаは靜かに答へた。

『今日逢つたばかりで、好き嫌ひは解るものではありません。』

この返事は私には物足らん感じを與へた。けど、然し又如何にも尤もの云分の様に思はれた。こんな質問を受けた場合、ロシアの女は斯う答へるものか知らと、私は考へた。

『私は今の所、この方を尊敬してゐます』と、彼女は云ひ足した。

尊敬？ どうも尊敬と云ふものは男女の中には有難くないものだ。我々は少つとも

尊敬されたくない。何故ならば尊敬されてる身から、戀の愛のと今更云はれるかい。誰れかど云つてゐた、凡そ世の中で自分の好きな女から、尊敬するわと云はれた時は

「苦しいことはない、尊敬だけは堅く御免だ」と。

今己れは其れを思ひ出して苦笑した。今更折角異國人が尊敬すると云つて呉れた言葉を取消してくれと頼む譯にもゆかず、尊敬などゝ聴くと全く身體が堅くなつて了ふ。あゝハルピンの美しい女から尊敬はいけねえ、いけねえ。一方の女はファイターと云ふた。ファイターは、僕の同行のロシア人と頻りに款を通ずる可く焦つてゐた。彼女は最初己れに思召があつたらしいけど、己れがヂンナを好きになつたことを早くも悟つて、最早望みなしと許り目的を他に轉じたんだ。ファイターは少くも此の道には經驗を顔に現はしてゐた。私は生活の窮迫と云ふことがヂンナをして此處境遇に走らせ、こんな女たちの中に介在させておくのが、氣の毒に堪えられなかつた。純なるヂンナは屹度日に日に荒れて手管を覺えて行くことであらう。私はヂンナの聰明な眸しから察し

て、一しほ惜しい氣がしてならなかつた。

「君は何處にゐるの？」と、僕はあなたを君に代へる程親しみのもとに訊いた。

「可成遠いの、△△町の何番地」と、答へた。

「一人で？」

「いゝえお友達と。」

「共同生活だね。」

「えゝ、このファイターさんも其の家よ、部室は違うけど。」

「君の所へ遊びに行つて見やうか。」

「ゐらしてもいゝわ、でもお友達も一緒だから。」

「一緒でなければいゝなア、君一人丈けならいゝなア！」

「何うして？」

「さア何うしてだか。」

二人は笑つた。

『時に今夜パレルムへ遊びに行かない？』

『パレルム？ うれしい、行くわ。』

『何時に行かうか、九時に此處へ迎へに来やうか。』

『え、そしたら着代へて来てますから。』

『これでいゝぢやないか。』

『これ？ これはヒドいわ』と、彼女は首を振つた。ファイターは自分が其の仲間に入れられなかつたので妙な顔をした。でも我々は一見その道の者と思はれる女と一緒に歩くことが好ましくなかつた。よく巴里や倫敦で日本人が酒々としてイカモノ女を連れ、芝居などに入出して、いゝ物笑ひになつてゐると聽いてゐるから。

夜の公園

今度は満鐵公所へ自動車で顔出した。古澤所長其他の社員の人達に遇つた。色んなハルピンの裏面の話が出た。

松浦商會へ戻つて来た時は、まだ日が高かつた。應接室にうつとりしてゐると、そこへ見るも賢婦人らしい淑かな夫人が靜かに出て来た。水上支配人は『僕の家内です』と紹介した。私は色々御厄介になりましたと首を下けた。

『本當にどんなことが私共に廻り遭ふものか解りませんですわねえ、御本でお名前は疾くから存じてましてどんな方か〜と想像してゐました所、先刻主人から聽いて驚いて了ひましたよ、よくこそ遠い所を、そして又よくこそ私共の此の家をお宿にして下さいました。どうぞおうちにゐらつしやる様な安らかな氣持ちで長く御滞在して頂

けば、どんなに結構でせう』と、それは心からの親切があふれてゐた、私は嬉しかつた。だから色々と話した。

『私も東京生れですよ』と、夫人は云ふた、それをきつかけに最近の東京の話も出た。夫人はなつかしい便でも聴く様に耳を済ましてゐた。

『お歸りになりたいと思ひませんか。』

『いゝえ、少つとも。物價は安いし、家はよし、それに欲しいと思ふものは何でもあつて居るんですもの、却つて住みようございます。たゞ病氣にでも罹つた時、良い醫者がゐないこと丈けが情なくなりますけど。その外は別に。』

此の時横から夫君は口を出した。

『兎に角此の方面へ嫁に來たものは、始めはホームシックやら異國人の顔やらで、ゐても立つても堪らぬ程故國へ歸りたがります。故國へ歸つて見ると、あそこ此處といふ顔出しやら、土産物やら、家が狭いやら、そのうち邪魔物あしらひやらで、こんなこ

となら歸らなきやよかつたと急いで戻つて來ます。だから妻に長く此處所で良人と一緒に居つて貰ふには、一旦歸りたいと云ひ出した時には、歸して見る方がいゝんですよ。それを止めると却つて悪い結果を招きますから。私の妻も一度その經驗を嘗めて來たものですから。』

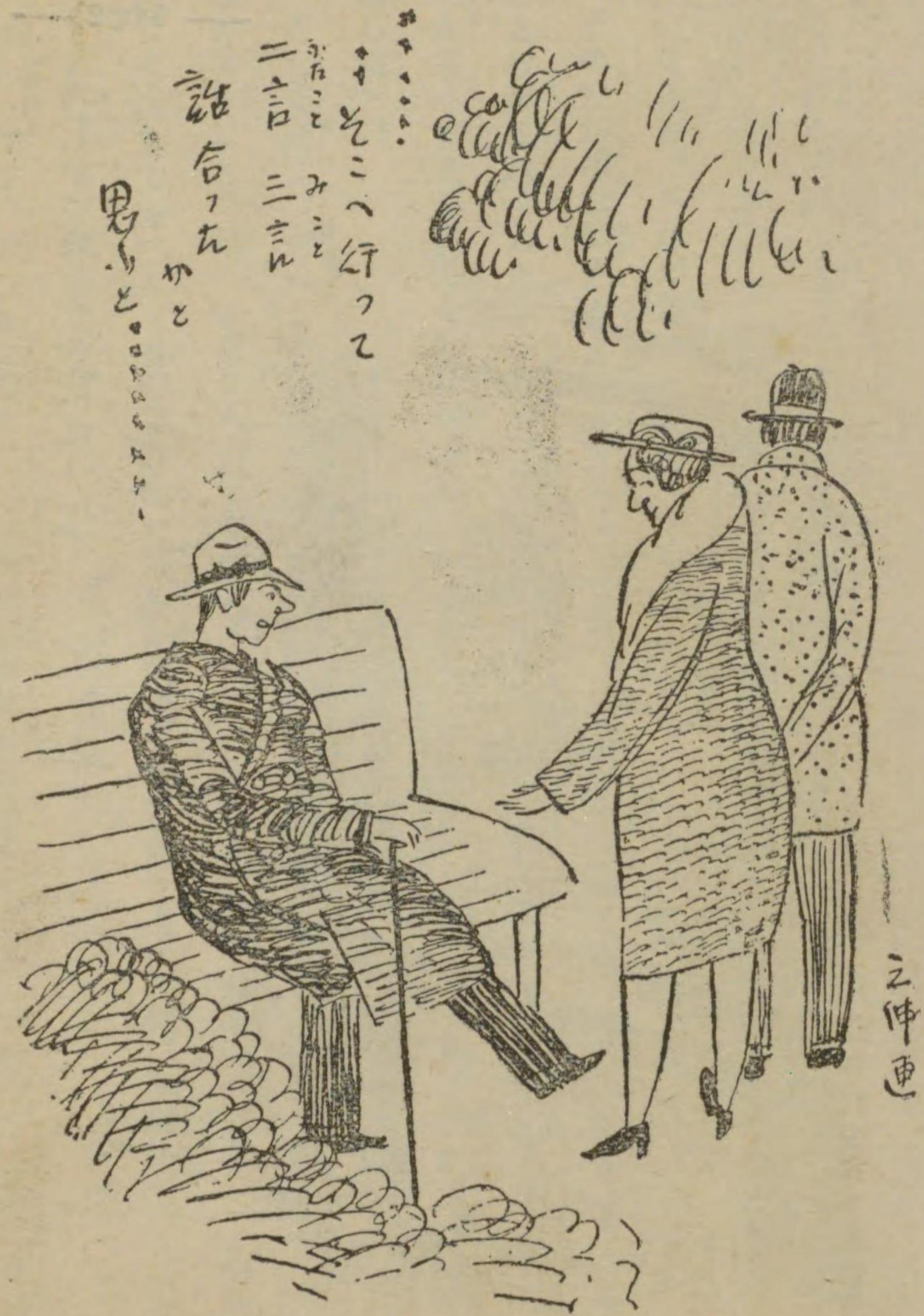
斯う云つて夫婦互に顔見合せてニツと笑つた。

『たゞ新聞なんかで今帝劇に勸進帳があるとか辨慶があるとか出ると、見たいなアーと思ふ位なものです。日本のいゝ芝居が見られぬと云ふこと丈けが苦痛ですナ』と、これは偽はらぬ告白らしかつた。

◎

夜、埠頭公園へと案内された。埠頭公園は矢つ張りキタイスカヤノの街、つまりハルビン第一の繁盛なる街、云ひ換へたならば、此の松浦商會より直ぐ近くにあつた。

公園の入口には支那の巡警が三四人立つてゐた。そして博覽會へでも入る様に、一



人一人巡々にしか入れなかつた。日比谷公園の様に互に肩を並べて入ることが出来なかつた。どの入口でも左様であつた。

さて入つて見て、己れは呀つと驚いて了つた。何たる華かな光景であらう。

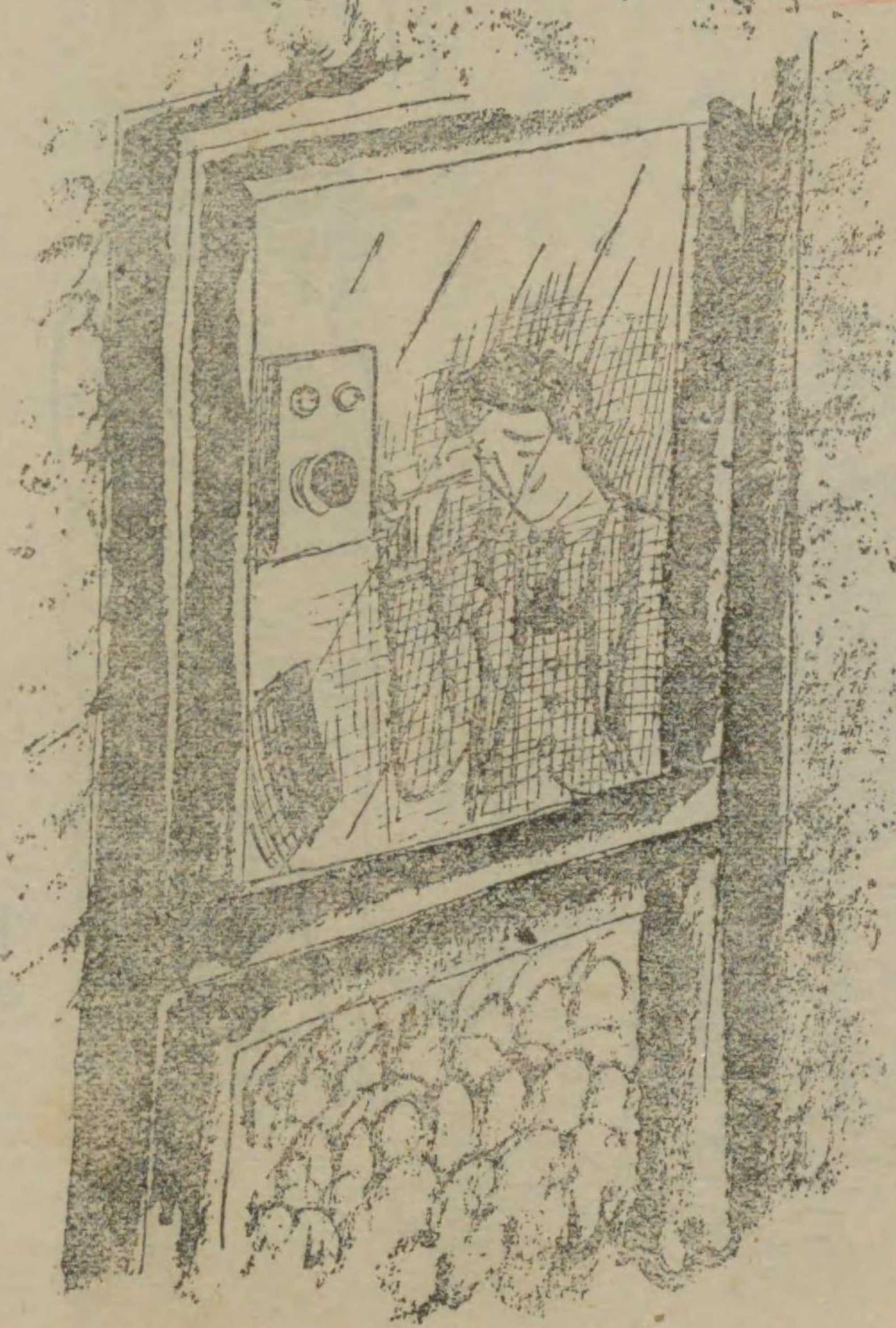
凡そハルビン中の妙齡の女と云ふ女、美人と云ふ美人が悉く集まつた様な美しさ、一艶麗さ、私は呆氣に取られるよりも驚喜した、驚喜するよりも愕然として、暫らくボカンとして立つて見てゐた。

公園内に一本の大道があつた。殆んど二町ほどあらう、その兩側には無數にベンチがあつた。大道以外は木であり草であり花であり、又小徑であつた。それ等は薄暗かつた。大道ばかりはカーンと電燈が晝の如く輝いてゐた。

その一本の大道を、それ等美人は若き青年と、中年と、又は姉妹と友人と、或は腕を組み、或は肩に手をかけ、如何にも睦まじく、笑ひ、戯ひ、口吟び、本當に心から樂し相に嬉し相にして往來してゐるんだ。たゞ同じ道を七遍も八遍も行つたり來たり

へいえあなた見たりな 此行方正の方か
と、いな 儂は吹りたんてすか、...

之仲画



して、疲れて来るとベンチに腰かけ、疲れが癒えると又歩き出すのだ。三間幅の大道は左から歩くものと、右から来るものとで、ギツシリ一杯だ。かれ等は押され〜て歩いてゐる。それが無上の楽しみらしい。

その快活相な顔や、華かな笑みつたらない、自分の國が何うなつてゐるやうが、そんなことは更々知らぬと云ふ風だ。否世界の中で自分たち程幸福なものはないと云ふ顔だ一人もムツとした顔をして居らぬ。一人も悲しげな表情をして居らぬ。皆ニコ〜と嬉し相だ。

そして見よ、何んと云ふ立派な體格だらう、美しい容貌だらう、あれも美人で、これも美人だと、己れはキヨロ〜として了つた。その歩き振りでも押され〜てゐながらも決してノロ〜としてゐない、歩調ゆるやかながらも、如何にも輕快で、見てゐても振り付きたくなる。

面白いのは、男でも女でも、ベンチに誰か知合があると、そこへ行つて一言二言話

合つたかと思ふと、今まで一緒に腕組んで歩いてゐた男又は女を其の儘おいてけほりにして、ペンチの男と新たに手を組み、新たに歩き出して行く。

僕等なら『おのれ失敬なツ』と、ムツとするんだけど、おいてけほりにされた者は決して怒らない、笑つて見送つてゐる。そして自分で又相手を探して同じく手を引いて歩き出す、そして今捨てゝ行つた者と途中で出會ふと、眼と眼で、笑みと、笑みとで物を云ふてゐる、それぢや之れ等は大方魔性の女だらうと思ふものがあるかも知れんけど、それは大違ひ、この公園へ来る連中は皆中流以上の家庭の子女だと云ふ。魔性の者は此處公園へは寄りつかないと云ふ。萬一寄り付いても何處となく、一遍で見破られて了ふから、大抵小徑の方、所謂この大道を避けた薄暗い方に来てゐると云ふ。だから魔性の女を求むる様な男は薄暗い方へと足を運ぶと云ふ。所謂同意相求むるらしい、白光の下では魔性でも活躍は心に恥づるものと見える。

それでは此處所へ来て居れば、さぞや娘などは誘惑されるだらうと想像されるが、

見知らぬ男が聲などは決して掛けぬ相だ。若し娘にそんな者が聲をかけたなり、又は誘惑がましいことをすると、女の方は四邊に誰がゐるようが、大聲あけて面責する相だ。そのことは極めて大膽に勇敢に遣つて退けると云ふことだ。だから恥を知る男は——否恥を知らぬ男でも其の眞似丈けはせぬと云ふ。つまり娘は怖れるよりも寧ろ向つて行く勇氣があるんだ。この點なんか日本の娘さん大に参考になると思ふ。

大道の間には大きなカフェーがあつた。そこでは絶えずダンスの曲を奏してゐた、客があまりなかつた。屹度人々は坐つてお互にコーヒーなどを飲み合ふよりか、手を組んで歩いてゐた方が面白いんだらう、それは半面性格の快活さを語る所のものであつた。

己れは嫁選び、または婿えらびは此處公園へ来てゐたら造作もなく片が付くと思ふた。全て花嫁花婿候補者見定め所みたいと思ふた。それほど集まつた。それ程美しかつた。

更に見てみると、面責が恐いんであらう、同じベンチに知らぬ男と、知らぬ女とが坐る男から物でも云ひ相なものだが、決して聲かけない、お互に知らん顔してゐる。己れは其の様子を見て感心もしたり、何となく男のテレさ加減が可笑しくもあつた。ハルピンの善良なる家庭では此の公園と、東支俱樂部が唯一の夜の樂天地だと云ふ。忘れぬ先きに書いておくが、新聞ではヤレ露西亞には今は處女と云ふものは一人もゐないと報道したり、或は甚だしきは大半は花柳病を持つてゐるとさへ傳へてゐるが吉村君に訊くと『そんな馬鹿な』と一笑に附して、奥の方は知りませんが、このハルピンのロシア人の家庭つたらそりや嚴格です。娘でもみな自覺してゐます。人妻にならぬ先きに處女を捨てるなどは絶対にないと云つて宜しい。だから同じハルピンでも表裏の差が餘りに甚だしい、裏面の淫蕩さを以つて善良なる家庭の子女を付度しては可哀想ですよ、どうぞ誤解してお書きにならぬ様と吉村君は特に念を入れた。わかりました。

秘密室

其の夜ロシア人のNは、面白い所へ案内すると云ひ出した。どんな所かと訊くと、若き未亡人たちが生活の窮迫の爲めに身を犠牲にする。それは極く秘密で、此のハルピンに於ても其麼者を知つてゐるものは極く少ないが、百方聞き合はして漸つとそんな者の出入りする所が解つたと云ふ、その苦心をどうか察して貰ひたい。至る所へ電話をかけて聞き合した所、『へーえ、あなた見たいな品行方正の方が何うした風が吹いたんですか』と、すつかり驚いた位です。そして漸つと知つた位です。そこへ行きませう、何かと小説の材料にもなりませうからと云ふ。如何にも小説の材料だ。それぢやと出掛けた。満鐵公所を少し行つてからNは馬車を止めた。何々レストランと書いてある階段を下りて行つた。

下りて行くと其處に支那人のボーイがツンと立つてゐた。Nはロシア語で何やら云ふた。するとボーイは頷づいて、薄暗い廊下へ案内して、一つの部室をキイと開けた、Nが先になつて入つて、僕等を坐らすや否や、その儘急いで出て行つた。ボーイに女のことに就いて云ひに行つたらしい。

部室に残された僕はグル／＼と見廻はして驚いて了つた。かゝつてゐる油畫はみな風俗壞亂の畫ばかりであつた。又部室の一隅にはベットに均しい長い柔かい安樂椅子があつた。幅と云ひ長さとも云ひ、全くベットであつた。

そののみか、更に猛烈極まる椅子があつた。それは此處でそれを説明すると、發賣禁止になるから、遺憾ながら憚るが、見てゐると氣極りが悪くなつて獨りでに頬が赤くなつて来る。そんな椅子が右と左にあつた。

『こんな六疊みたいな部室に何うして、三つも此處ものがあるんだらう』と、折柄入つて来たNに訊いたら、彼は吉村君を一つに坐らせ、僕も一つに坐らせ、最後に自分

も一つに坐つて、ブツと電氣を消して、『○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○』と云ふた。意味や深長、フォームと云つて己れは感心して了つた。

再び電氣が付けられた、ウオツカを飲みながらNは吉村君相手に色々と話かけた。僕は少つとも解らなかつた。

殆んど一時開程待つたらう、何んでか人の氣配がドアの外でした。すると其れを逸早く耳にしたNはヂツと扉を見詰めた、コツ／＼と叩する音がした。オーライと云ふ様なことをNは云ふた。するとスツと開いた、女だつた、若い女だつた。

以下吉村君の通譯でNと其の女との會話を書く。

『ようこそ。』

『お待ちになつて?』

『可成待つたよ。家は遠いの? 近ければお宅へ行きませうか。』

『直ぐそこなの、でも何んだか』と、恥かしがり、

『私を愛して下さるの貴方?』

『さア、それはまだ解らない、ではまア此處で話でもしませう。』

『あなたのお連れは日本人? 支那人?』

『日本人だよ、立派な方ばかり、二人とも美男子でせう?』

『ホツホ、。』

『あなた此の家へ時々らつしやる?』

『さア何うだか、そんなこと訊くものぢやないことよ。』

『どうです、これ飲まない?』

『なに、ウオツカ? 私し葡萄酒がいゝわ。』

『それでは』と、Nは呼鈴を押した。ボーイが來た。命ぜられたものが運ばれた。

『まアいゝ色、唇の色の様だわ。』

『あなたの唇の色の様な。』

『私の唇、こんなに赤い? うれしいわ、さア飲みませう。』

私は一切酒は飲めないのです、そのままであつた。

『この日本人の方は何うしてお飲みでないんでせう?』

『酒はおきらひなんです。』

『男で酒きらひの方あるものか知ら、私し始めてだわ。葡萄酒ですからいゝでせう?』

『葡萄酒でも何んでも一口飲むと、眞赤になつて了ふんだ相です。』

『ぢや仕方がないわ、三人で』と、云ひながら、互に杯をコツンくと觸れ合せな

がら、何やら云つて、多分健やかにあれと云ふたんだらう、グツと飲んだ。此の杯を

共に上げ、杯と杯をキツスさせることが何よりの親密の情を示す互の表徴である。

一しきり酒を飲んで話合つてゐたかと思ふと、もうNと女は戯け始めた。互に歌ふ

やら顔の表情面白く調子を取るやら、それは賑かで、それは又愉快相である。了ひに

は頬べたを擦れ合つて興がつてゐた。

そこへ又コツ／＼と叩された。英語のカムインと云ふことをロシア語でNは云ふらしい。戸があいた、これも女だつた。帽子を眞深に被つてニツとして入つて来て坐つた。脊が殊更に高かつた。

女同志は未知であつたけど、舊知の如く直ぐ言葉をかけ、直ぐ馴れ親しんだ。

その後幾度も斯う云ふ場所へ来て僕は感じたんだが、たとへ初對面の者にしろ、ロシアの女は十年の知己の様に振舞ふ。いかにも親しげに言葉をかけ、淋し相にしてると、百方慰め様とする。交際が上手だと云ふのか。それが國民性だと云ふのか、決してテレたり羞かしがつたり、或は遠慮したりしない。自分の性格そのものを曝け出す、ほんとうに正直で恬淡である。この點大に氣に入つた。

二度目に入つて来た女は、少し眼に凄味があつた。美人であるかないかは帽子を取つて見なくちや解らないといふことも、僕は幾多の友人から聽かされてゐたんだ。帽子を被つてゐる時、素敵に美人に見えても、帽子を脱いだ時、オヤ／＼と逃げ出した

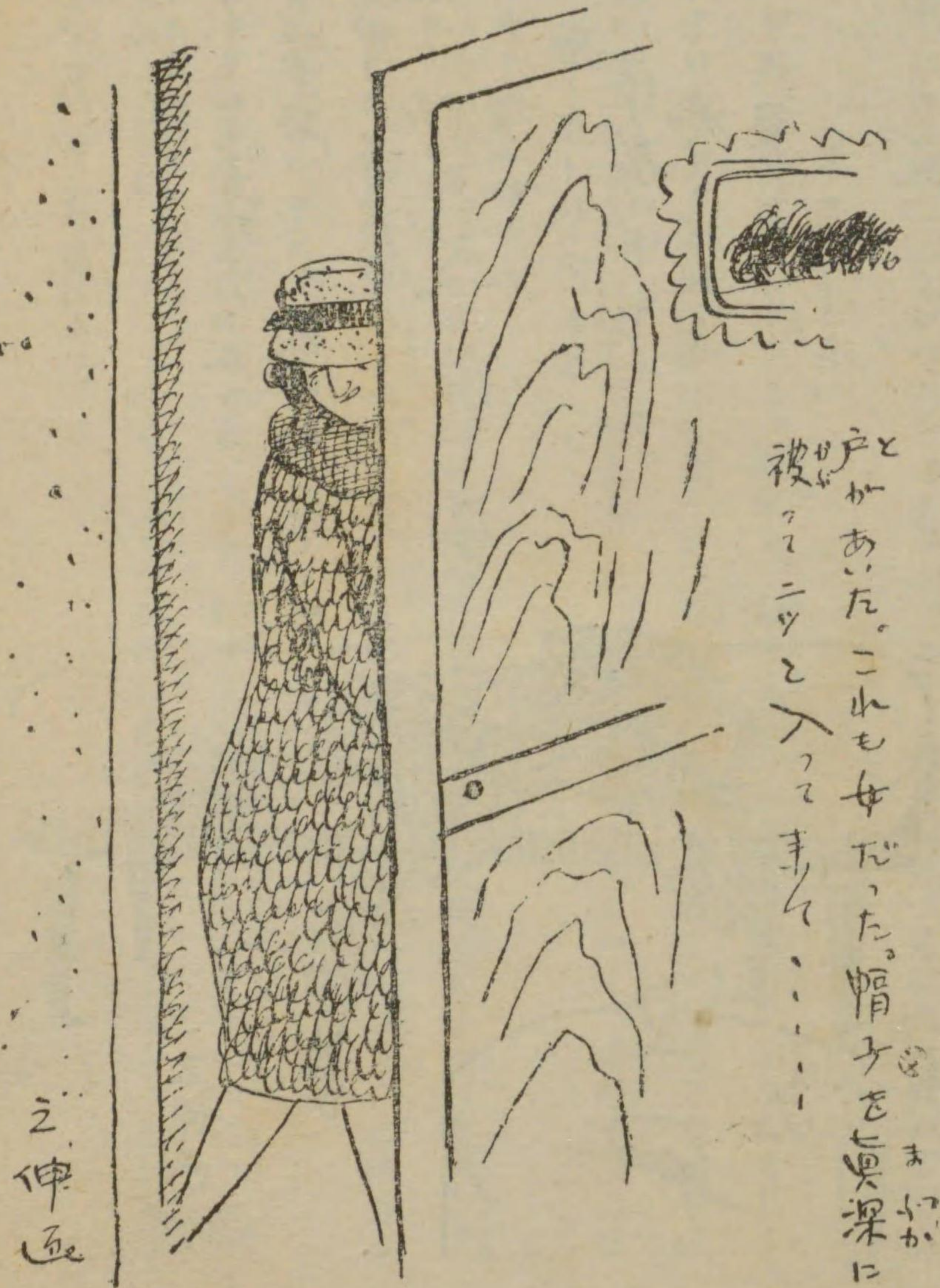
くなる御面相が澤山ある。外人は其の點は非常に巧妙だから、そいつを先づ見たまへと云はれて居つたから、そいつを先づ見る爲めに己れはヂツと泰然と構へてゐた。するとその裡女は最前からる女から、幾度も幾度も帽子をお脱ぎなさいと勧められて遂に脱いだ。己れは見た。こりやと思はず澁面作らざるを得なかつた、額がピラミツドの様に三角形を爲してゐるんだもの。その上、目は妻く光つてゐるし、今にも喰ひ付き相だ。逃げる、逃げる、それと比べたら最初に入つた来た女の方は美人ではないが、純然たるロシア型であつた。よく小説や芝居で見るそのまゝであつた、而かも愛嬌があつた。

『今来た女を何う思ひます？』

Nは僕に訊いた。

『氣に入りませんね』と、答へた。

『ぢや何處の氣に入るんです？』



戸かあいた、これは女だった。帽子を奥深に被ってニツと入って来り、……

之伸延

『いゝや、私は唯この種の女がハルピンにゐるのを見さへすればいゝんです、外に何等の望みも。』

『さうですか』と意味ある笑ひを洩らしながら、

『あなたは自分の気に入らない女だから、さう仰言るんでせう？』

『いゝや決して。』

『一體あなたは何癡型が好きなんです？』

『私し？ さうですね、好きな型つたら、先づデнна見たいのがいゝでせうなア』

『デнна？ デнна？』と、口おさんで、

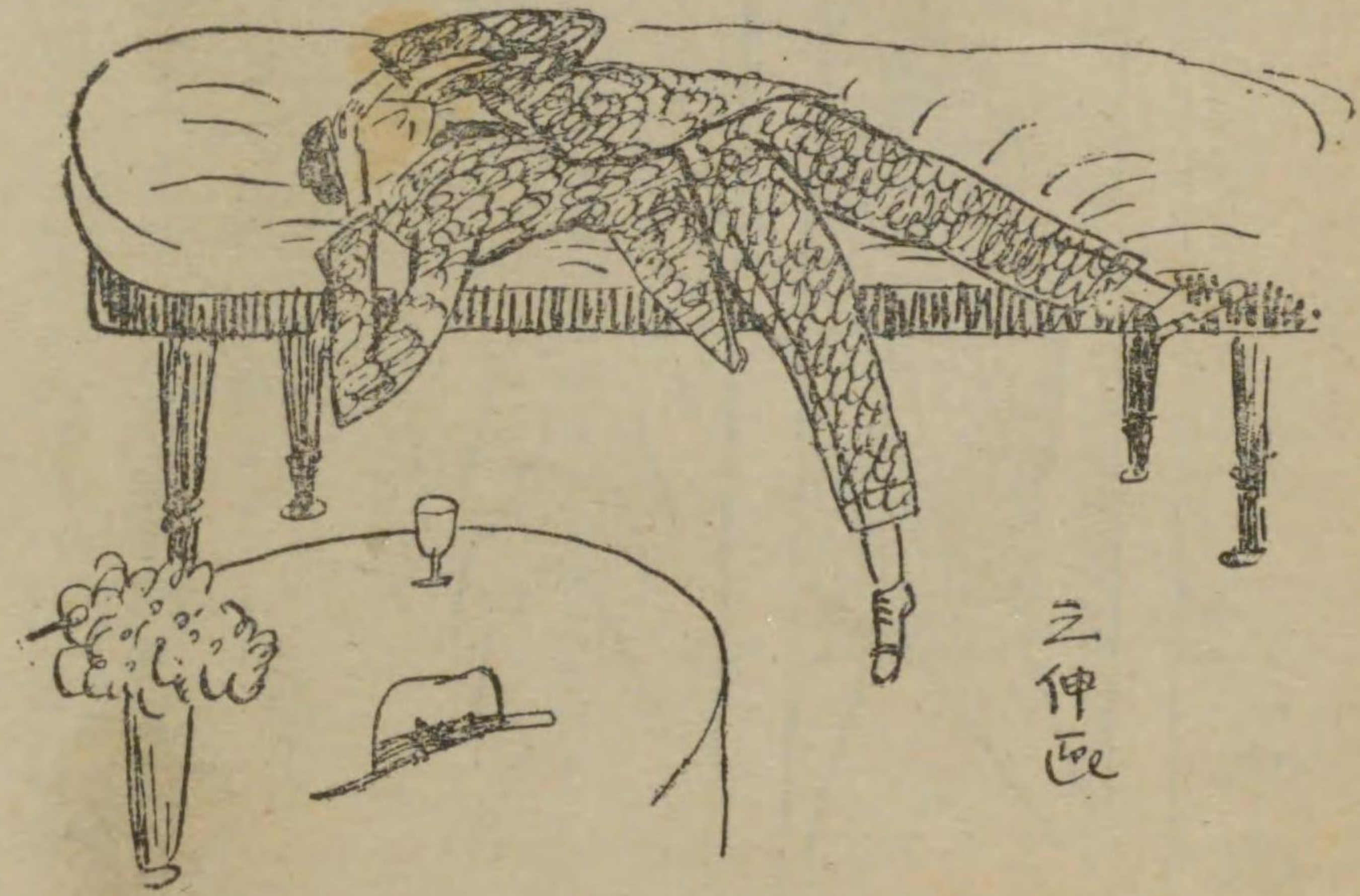
『デннаで、晝カフェーロシアで逢つたあれ？』

『左様です。』

『どうして彼癡女がいゝんでせう、種が違ひますよ、此方の方がズツと。』

『種が違つてもあの女には頭脳がある、そして純だ。又娘らしい、僕の前で泣いて呉

果ては餘りのおそきに
 カツカリして長椅子の上へ
 その儘横になつて眼を閉
 精神の昂奮から
 ハツキリ閉けてゐた
 それも堪へやうと
 何處となく己れは
 狭い部屋の中を歩そ
 見たり樹けて見たり
 或は又横になつて
 りたりーた。



三伸匠

れた、嘘ではあの涙が出なかつたらうと思ふ。あすこが可愛い、僕はあんなのが好きです。』

『左様ですか』とNは國が違ふと、趣味まで斯うも違ふものかと意外に思ふたらしく『では今からデナナの所へ出かけませうか、殊に先刻約束までして來たんですから。』
 『先刻は九時に來ると云ひ残して來ましたね、ハテ今何時か知ら』と、時計を出して見た。

『オヤ十一時半です、デナナは待ほけを喰つたらうに。そして日本人は嘘付きだと憤つたに違ひない。我々は日本人の爲めに、一人のロシア人からでも悪ざまに云はれる行爲をしたくない、恨んでゐるだらうなア』

『いや、その罪は全部私にありますから。私が先刻公園で貴方がデナナの所へと云ふたのを此方へ引張つたんですから、決してあなたに御迷惑をかけません。それでは出掛けませう』と、Nは云ふた。

『この女だちは？』と、聞くと、

『なアに今歸しますから』と、云ひつゝ一人一人を別々に拉して何やら小さい聲で囁いてゐた。大方こゝにゐる日本人が邪魔になるから、いづれ僕一人で出掛けて來るから、其の時にはとでも云ふたんだらう。女達は不平顔もせず納得して歸つて行つた。

深夜の享樂

再びカフェエロシアへと遣つて來た、もう十二時を過ぎて了つた。

『デナナは？』と、訊くと、

『デナナ？ もう歸りました』と、云ふ。ロシアでは何處の料理屋でも又カフェエでも曉方の四時まで遣つてゐると云ふことだのに、こりや怪しいと許り、

『どうして歸つたんです？』と、脊の高い肥えた此の家の給仕婆さんに訊いた。

『何んでも六時頃に一旦かへつて、八時過ぎに着物を着代へて遣つて來ましたよ。そして日本人——あなたのこととせう——を九時半頃まで待つてゐましたよ。でもお見えでないものだから到頭歸りました』と、其のロシア婆さんが云ふた。それを聞いた時己れは何だか日本人の體面をけがした様に思ふて、胸に五寸釘でも打たれる様な氣がした。濟まぬ濟まぬと心の中で思ふた。そして彼女が純であつたればこそ、且つ又尊敬する日本人たる僕の言葉を信じたなればこそ、着代へまでして遣つて來たではないかと思ふと、無精に逢ひたくなつた。逢つて詫びの言葉を直接本人にしなくちやならない氣がした。そこで何うかしてデナナに逢ひたいと云ふた。そして何うしてもデナナが來ないのなら此の儘直ぐ歸つて了ふと云ふた。

すると横にヂツと耳を濟ましてゐた肥つた二十四五の女が、

『呼びませう』と、云ふた。

『屹度呼ぶか』と、Nは念を押した。

云ふ氣持ちを持つたことの無い自分に、不思議な位の焦々しさが何んの爲めに胸の中を渦まいてゐるんであらう。

『デннаはまだ？ デннаはまだ？』と、己れを幾度も訊いた。果ては餘りの遅さにガツカリして、長椅子の上へ其の儘横になつて、眼丈け精神の昂奮からハツキリあけてゐた。それも堪えやらで、何遍となしに己れは狭い部室の中を歩いて見たり、掛けて見たり、或は又横になつて見たりしてゐた。

恰度椅子にかけてゐる時であつた。その時部室にゐなかつた毒々しい女が、叩ももどかし氣にサツと扉をあけるが早いか、高らかに云ふた。

『デннаが來ましたツ。』

己れは急に甦へつた様にガバツと首を上げた。

『デннаが？ 何處に？ 早くツ。』

『え、今直ぐ來ます。』

それから十分間ばかり姿を見せなかつた、幾度も其の毒々しいのに催促した所、今來ます、今來ます』と、許り返事してゐた。いゝ加減なことを云つて、空喜びさせたナと思ふてムツとしたが、彼女は此處へ着いてから、別室でお化粧してゐたものらしい、後でデннаを見た時、私は左様察しられた。然し私にはデннаが此の部室へ來るまで、どこか他の部室で男と戯むれてゐたのではあるまいかと云ふ疑が時々した、あの女に限つてそんなことはと、思ふて見たり消して見たりしてゐた。そして若し左様であつたとしても、それは咎む可き権利が全然こつちには無いではないかと、公平に判断もして見た。たつた一度逢つた限りだに、先方では左まで深くも考へてゐないだらうに。

などゝ様々に思ひ亂れてゐた。

そこへ快活な顔をサツとデннаが見せて呉れた時、疑ひも又亂れも、みんな己れは忘れて了つた。思はず大きく笑んで喜び迎へた。デннаは一番先きに僕の傍へと進ん

で来た。そして堅く握手した。見れば晝と違つて綺麗にお化粧してゐた。着物も變つてゐた、着物（つまり洋服のこと）は品は晝のより宜かつたけど、柄が見劣りせられた。デннаの顔には晝の分の方がズツと似合つた。私には晝見たデннаの方が美しかつた。お化粧も着換へもしないデннаの方が私には好ましかつた。然しデннаそのものゝ本體に變りがなかつたことは、そんな些細なことを敢て深く意にするにも及ばぬことであつた。

『さあデнна、貴女は何がいゝ？』と、私は訊いた。

先刻から注文する料理はデннаが來てからと云ふことになつてゐたんだ、そしてデннаの欲するもので、この食卓を賑はさうと待つてゐたんだ。でない、既に注文され既に列べられてあつたのを見た時、デннаは確かに或る種の不快——自分を出し抜いたと云ふ不快を——感じたに違ひなかつたであらう。

自分が來るまで皆が待つてゐて呉れたと云ふことは少なくとも快感であつた、猶又そ

の欲するものは自分を主とされたものだと云ふことも之れ又快感であつた。

デннаはジツと献立表を見詰めた。そして立つてゐた給仕婆さんに、

『これと、これ』と、注文した。すると毒々しいのが覗いて見て、更に其の上何やかと加へた。酒も新たに色々云ふた。

『シャンパンが飲みたい』と、云ふたけど、Nは首を烈しく振つて斷はつた。シャンパンは酒の中で最も高價なので、斯う云ふ馴れぬ日本人などが來ると、これ幸ひと當つて見るんだと云ふ。それを事情をよく知らない者が何んでも『ウム、ウム』と甘くなつて承諾すると、あとで勘定書の時、ウアーと悲鳴を上げるんだと云ふ。かれ等は鬼もすれば金を持つてゐると睨むと、此のシャンパンを強請ることを忘れないと吉村君は僕に注意しながら説明してから、

『こいつ厭な奴だ』と、吐き出す様に云ふて、

『つまり此奴は古顔だし、大分呼吸を知つてゐるものだから、出来る丈けかれこれ注文

すれば畢竟金高が多くなる。従つて此のカフェーの儲けも多くなる。云はゞ内々結託してゐるんですよ、だから姉さん株にあつかはれて幅を利かしてゐるんですよ。此奴つたら別に頼みもしないのに、勝手に此の部屋へ來やがつて」と、吉村君すつかり憤慨した。それを聴くと己れは其の女が益々毒々しく見えて、ゐても立つてもゐられなかつた、列しい憎悪で一杯だつた。

チンナは運ばれた料理をサモ快よけに喰べた、チンナが口を美味相に動かしてゐる時には、己れまでが何んとも云へぬ愉快であつたけど、毒々がフオークを使つてゐるのを見る時不快この上もなかつた。その人間を好き嫌ふと云ふことが、ごんなに迄感情を左右するものかと自分ながら不思議でならない、恐らく然し誰でも左様であらう。私は毒々(妙な綽名にして了つた)の代りに寧ろ晝チンナと一緒にだつたファイターの方がゐる呉れた方が遙かにいゝと思ふた。そしてファイターは向ふにゐる何麼に氣を悪くしてゐるだらうと濟まない氣がした。かの女は屹度此の毒々が勝手に出シヤ張つた

ことをいま／＼しく思ふてゐるに違ひない。

毒々は毒々で自分がチンナを此處へ呼寄せたんだからと云ふ口實と名目があつた。その誇りから此の部屋へ來てゐることが、我々にはチャンと解つてゐた。私のお蔭でチンナが來たんぢやありませんかど鼻にブラ下がつてゐた、又それがある爲めに強ひて退席を彼女に求められなかつたんだ。チエツと思ひながらも仕方が無かつた。

チンナは僅かしか酒が飲めなかつた。このことは私には嬉しいことの一つであつた。何故ならば彼女が此のカフェーへ昨日來た許りと云つた言葉を立派に裏書きする證據であつた。若し彼女がドシ／＼と飲んだなら、女學生であつたと告げた言葉が、如何にも怪しくなるのだが、今見てゐると、コップや杯の持ち方が如何にも無器用であつたのみならず、且つ酒は殆んど嘗める様にして僅かしか口にせず、反對にアルコール分のない甘味たつぷりな赤い液(ラスベリー見たいなもの)だと、喜んで口にしたなどは、矢つ張り私の見た最初の彼女を偽らなかつた行爲であつた。

Nや女たちは歌つては喰ひ、喰つては歌つた。喜びの世界にかつれてゐた様に楽しくも、また嬉しくも。

○
いつの間にか又一人女が入つて来た。察するに毒々の差金か、或は毒々が妹分としてゐる女か。その女は然し悪相ではなかつた。をだやかな眼付きと、どこことなくおつとりした所があつた。

黒衣着物を來てゐた故もあらう、又ちつともお化粧をしてなかつた故もあらう、色が馬鹿に黒く見えた。絶えずニコ／＼としてゐた。彼女も亦一隅に座して、勧めらるるがまゝに杯を手にして一座を賑かにした。

先刻から外のあけツ放しの部屋（特別室でない場所）から、絶えずピアノやバイオリンの音が様々の音楽を奏して、われ／＼の耳を樂しませてゐるが、恰度この時ダンスのフォクストロツトが奏せられたので、己れは堪らなくなつて、身振り面白く調子

を取つた。すると黒服之を見てとつて、

『貴方はダンスが出来るの？』と、僕の顔を覗いた。すると横にゐた吉村君は口を出して、

『この人は日本で有名なダンサーだよ』と、云ふた。

『本當？』

『本當さ。』

『ぢや踊りませうか。』

『君踊れる？』と、己れは訊いた。

『えゝ少しばかり。』

『ぢや踊らうか』と、己れは乗り出した。すると外の女連中は面白がつて、踊りなさいつたら踊りなさいつたらと熱心に勧めた。

よしツと許り己れはいきなり立上つた。そして扉を排した。黒服は直ぐ隨いて來た。

續いて外の女たちもゾロ／＼と其の後から隨いて來た。

そこには特別室入りしない三四組の客が各々隅の方に陣取つて、フォークを動かしてゐた。給仕婆さんは其處等あたりを少しく片附けた。

『さア踊りなさい』と、相圖した。私共の部室にゐなかつた女も立つて見てゐた、その中にはファイターも交つてゐた。氣の故かファイターは何故私を呼んで呉れないのだと云ふ様な顔をしてゐた。でも其れとも云ひかねて、恨みをこめながらも淋しい笑みで私と挨拶の眼を交はした。我々がドツと押し寄せたので、何事が起つたんだらうと許り、ピアノニストもウバイオリストも弾く手を止めた、そして私の顔を見た。

『フォックス、トロット』と、己れは云ふた。はあダンスかと樂手は頷いた。

曲は弾かれた。

私は彼女を抱えながら、巧みなる踊り振りを見せた。彼女は露西亞獨特のダンスに馴れてゐる故か、廻ることは上手であつたけど、全然歩調のステツプは出来なかつた。

仕方がないから私は歩調を抜きにして、グル／＼と風車の如く廻つて見せた。

多くの視線は悉く私の上に乗まつた。私は得意絶頂であつた。

一曲終ると、拍手がパチ／＼と小さい部室に満たされた。給仕婆さんが一番先きに飛んで來た『まあお上手なこと！』と、驚きの表情を見せながら云ふた。續いてチンナが飛んで來るが早いか、いきなり強く／＼握手して呉れた。そしてサモみんなに此の人は私のものよと云ふ様な誇らしさを示して見せた。みんなは今更の様にチンナを美しく思ふ様な顔付してゐた。舞踏好きなロシア人に此の巧みなるダンサーは確かに羨望であつたに違ひない。私はダンスは運動の爲めに東京で習つたんだが、ハルピンへ來て一度ならず二度までも役に立つたので、何が幸ひになるか解らぬものだと思ふた。確かに私が優秀なダンスの技能を知つてゐたことは彼女等には大なる驚嘆であつた。讚美であつた。私は皆から『上手だ、うまいもんだ』と取巻かれた時の鼻高き。自分たちの部室へ戻つて一休みする間もなく再び樂は鳴つた、ワルツだ。樂手は久



久(ひさ)で良(よ)いダンサーが自(じ)分(ぶん)た(た)ちの弾(ひ)く音(ね)で踊(おど)り出(だ)したこ(こ)とが愉(ゆ)快(かい)にな(な)つたん(んで)あらう。
 黒(くろ)服(ふく)はすつかり嬉(うれ)しがつて、

『あらワルツよ、踊(おど)りませうか。』

ダンスの中(なか)でワルツは一番(いちばん)面白(おもしろ)味(あじ)が少(すく)ないもの(のだ)。だから、

『ワルツはどうも』と、云(い)ふと、

『ワルツは駄(だ)目(め)？』と、彼(かの)女(ぢよ)は覗(のぞ)いた。その駄(だ)目(め)？ と云(い)つたのは踊(おど)れないの(の)？ と

云(い)ふ意(い)味(あじ)にとれたから、おのれ再(また)び吃(びっくり)驚(おどろ)させてやらうと許(ゆる)り、

『踊(おど)りませう』と、又(また)立(た)ち上(あ)つた。そして其(その)處(こ)へ行(い)つて、型(かた)の如(ごと)く彼(かの)女(ぢよ)を抱(かか)えるが早(はや)

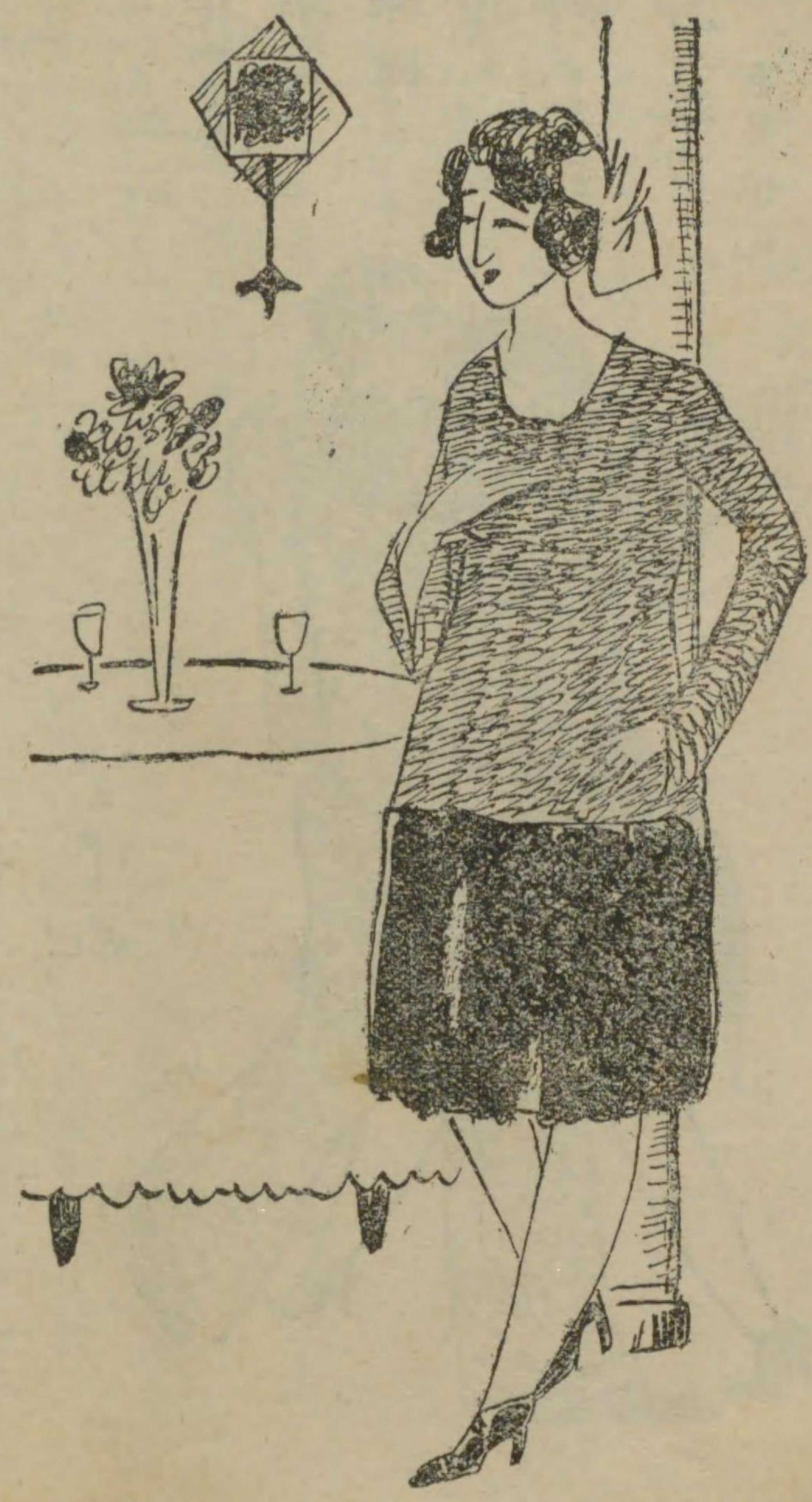
い(い)か蝴(こ)蝶(てつ)の様(よう)に鮮(あ)やかな踊(おど)り振(び)りを見(み)せた。

いつの間(ま)に集(あ)まつたんだらう、入(い)口(ぐち)の所(ところ)に汚(きた)ない支(し)那(な)人(じん)が黒(くろ)だか(り)にな(な)つて、中(なか)を

覗(のぞ)いてるた。そして頻(しばしば)りにワイ(ワイ)く云(い)つてるた。屹(きつ)度(と)珍(めづ)らしいんだらう。殊(こと)に踊(おど)つて

る者(もの)が日(に)本(ほん)人(じん)であつたので、猶(なほ)好(こう)奇(き)心(しん)に燃(も)えたんだらう。かれ等(ら)は次(し)第(だい)に集(あ)まつた。

今ニテは、珠トソウレ柱にもちよて
此方を、ケツと見てゐた



之伸画

眼玉がシロく〜と幾つとなく硝子越に光つてゐた、多くは馬車の馭者らしい下等者であつた。

踊つてゐて之を見た己れは急に氣味悪くなつた。第一かれ等は反感を抱いて何處こ
とを仕出かすかも知れぬと思ふた。第二に此處有様を見て彼等は屹度あの日本人は相
當金を持つてゐるに違ひない、後で歸りに、どうせ俺たちの馬車に乗るだらうから、
其の時仲間を申合せておいて突然棍棒か何かでバツタリ遣ツ付けて遣らうと、思ふて
やしないだらうかと臆測された。支那人は金を持つてゐると思ふたら一番危険だ相
ある。確か奉天で聞いたんだが、骨董物を買ふ時でも、これを幾價に負けろと云ふ、
どうしても負けぬと先方が云ふ、それでは買はぬと云つて、立上つても、仕方があり
ません其處に負けちやと嘯く、そこで金を出して見せてどうしても負けぬのだナと
今一度念を押すと、金の顔を見ると、急に其の金が無精に欲しくなつてきて、損して
でも其の品を賣拂つて了ふ相である。

又如何なる所でも、金を澤山持つてゐることを見知つたら急に變な氣を起して、どんな危害を加へるか解らん相である。序だから更に書くが、支那とかシベリヤ内地を旅行する時、護身用として短銃なんか持つてゐると、支那人は其の短銃が欲しさに、旅行者を殺して了ふことが間々ある相だ、だから寧ろ何も持つてゐないのが一番安全だと云ふ。

ツイ横道へ外れたが、私は其慶事を考へると、覗き込んでゐる支那人達が不安で堪らなかつたので、急にダンスを止めて了つた。そして急いで奥へ入つて了つた。黒服は變な顔して後から隨いて來た。それから幾度となく咬る様にダンスの曲が鳴つた、けど己れは再び出なかつた。

『どうなすつたの?』と、黒服は妙に思ふたか訊いた。

『支那人が澤山見てゐるから。』

『見てゐるちや不可ないの?』

『不可ないんだよ。』

『あら何故?』

『氣味が悪い。』

『さう?』と、云つたが、充分に解せない様子だつた。彼女は他人が見て居れば居る程張合があるちやありませんか、とでも思ふたらしかつた。

夜の一時二時頃

黒服は馬鹿にそれからと云ふものは、己れをなつかしんだ。出来るだけ僕の近くに接觸して居たい様だつたけど、デンナを憚つて、何んもなく遠慮の體であつた。然し私が立上ると彼女も立上つた。私がベット式に腰掛けると、彼女も横へ來て坐つた。そして私の手をいぢつたり、叩いて見たりした。私は時々態と彼女の肩へ手をかけて

恰度デннаの後だつたので、『デнна』と呼んだ。デннаは振向いた。
『いけません、いけません』と、にらむ眞似した。それから二人で様々の眞似しては
デннаに見せた。

『あなた、此處へ来てお坐りなさい』と、デннаは遂に云ふた。立上らうとすると、
黒服は『斯うしてゐらつしやい』と、許り制して見せた。黒服は優しい氣立の娘であつ
た。デннаにしる黒服にしる次第に毒々の悪い感化を受けて行くのかと思ふと、どう
かして斯う云ふ巷から救つて遣りたい氣がした、然し左様思ふばかりで、何うするこ
とも出来ないことであつた。

時計がもう三時を過ぎた。それでもNにしる吉村君にしる平氣である。これからだ
と云ふ顔をして飲んでゐる。その氣の長いつたらない。夜が明けたら明けたでいゝぢ
やないかと許りだ。これには驚かされた。吉村君は『香氣と長の長いことはロシア人
の通有性です。僕なんかもう馴れて了ひました。遊び出したら時間の觀念なんかあり

ません』と、云ふた。眠むさうに眼を擦りあけながらも、歌ふたり飲んだり、全く時
間の觀念がない。夜を一刻千金とばかり楽しんでゐる。

序だから又書くが、ロシアでは晝の十二時から三時までを晝寢の時間として、官省
會社、商店みな閉ざして了ふ。その晝寢は何んの爲めにするのかと云ふと、夜を樂し
むが爲めである。だから出勤時間は朝の九時で、退出は五時とすると、働く時間は僅
か五時間しかない。

それ故夕飯は大抵夜の九時か十時だと云ふ、だから朝の一時二時までは日本では深
更でもロシアでは宵の頃にしか思はれぬ。だから馬車はどんなに遅くてもゐる。又ど
んなに遅くても人通りのないことがない、夜の一時二時頃でも、夫人や娘が平氣で歩
いてゐるのをその後折り節私は見つた。

そんなことまでして、ロシア人は夜の氣分を待つてゐる。楽しんでゐる。ロシアの
生命は夜である。

私はデンナと二人丈けで、散歩して見たくなつた。そして出来るなら二人丈けでパレルムへ之れから出掛けてもいゝと思ふた。パレルムと云へばデンナは先刻約束の九時に來なかつたことに就いては、此方が心配してゐた程、憤つてゐなかつた。憤つてゐる所か、そのことに就いては一言も云はなかつた。屹度僕の顔を見たら嬉しくなつて云ふことを忘れて了つたんだらう。

Nはデンナは此の日本人が斯う云つてゐると云つた。デンナは一二もなく承知した。そして何處へでも行くと云ふた。皆は先づいゝ鹽梅だと云ふ顔を見せた。二人丈けになつても、己れは言葉は解らぬが、手眞似足眞似したら通じないこともあるまいと思ふた。人間は全く言葉と言葉が通ぜぬ同志であつたら、どんな仕草をするものだらう。どれ丈けそして了解出来るものだらうと寧ろ面白いと思ふた。それには誰も傍にゐないことが必要であつた。考へて見れば心細く又齒痒いこともあらうが、そこが興味の

あることだ。

それではと、デンナが出掛ける可く、用意しに行つたが、いくら待つて居ても來ないので、Nが見に行つた。そのNが又いくら待つてゐても歸つて來ないので、今度は吉村君が見に出かけた。

その又吉村君が少つとも戻つて來ないんだから、己れは怪しいと思ふた。心細くもなつた。何が何やらサツパリ解らぬので、僕は變に思ふて扉を押して部屋の外へと様子を見に出た。すると其處にデンナと吉村君が一生懸命何かと小聲で話してゐる。片方の隅には毒々とNとが同じく眞顔になつて聲を密めてゐた。何をしてゐるんだらうと、フと向ふの方を見ると、ファイターが見るも怖ろしい顔をして、眼を怒らし、光らせてゐた。

『君、何事が起つたの?』と、吉村君に己れは訊いた。

『いや何んでもない』と、務めて軽く打消したが、強いて己れは『どうしたんだい?』

と訊いたので、到頭口を切つた。

『實はあのファイター、あれがデンナの姉さん顔になつてゐるんだが、急にデンナの外出に不承知を唱へたんです。それで何うして不承知を唱へたか其の理由を訊いてゐるんです、そして何うかして其れを和けることが出来ないかとも相談仕合てるんです。』

もう己れには解つた。ファイターは自分が晝、僕等と顔馴染でありながら、退け者にされたことを憤つて此處ことを云ひ出したらしい、そして自分を退け者にしたのはあの毒々の仕業だと見たらしい、それでなくてさへ毒々が我々客を奪つたことを心外千萬に思ふてゐたのに、黒服みたいな外の女を侍らして馳走の相伴をさせながら、外ならぬ自分を殊に度外視したのは、餘りに馬鹿にした仕打だと、云はど毒々の我々に對する面目玉をつぶす爲めに、デンナの外出を姉分たる権利として峻拒したらしい。

猶また吉村君の話に依るとデンナはファイターの世話で此のカフェへ入つたんだと云ふ。だから強いて姉さんの云ふことを諾かなかつたら、私は此處を出て了はな

やならない、そしたら私の行く所がない、明日からパンの道がない、私は此の日本人は好きですが、そんな譯ですから今日は諦めて下さいと、訴へてゐる最中だと云ふ。

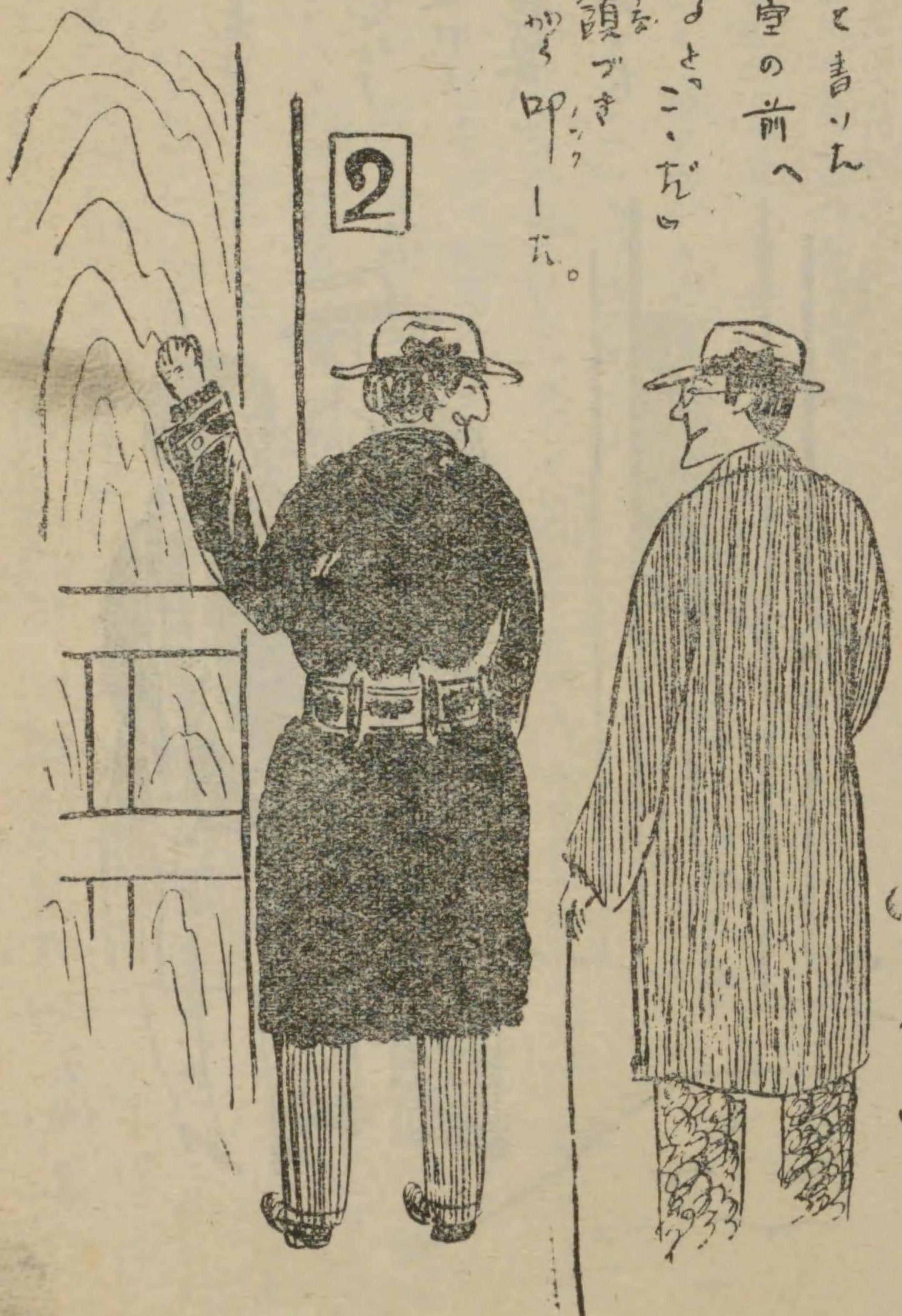
毒々とファイターは、どつちも敵同志みたいな眼付きをした。

それから可成の間、ゴタ／＼してゐた。遂にNと吉村君はファイターに頼む様に願つた。然し一旦心を傷けられたファイターは頑として應じなかつた。そして其の際念を入れた『私は決して貴方々やあの日本人に憎みを持つてゐません、たゞ私は』と、云つてデロリと毒々の顔を射り付けた。それには最早施す業もなかつた。

『ぢや仕方がないから歸りませう』と、私は云ふた。

『どうにかならぬものかなア』と、Nは頻りと斡旋の道を考へた。然しファイターの強い意志は逆でも曲けられ相でもなかつた。

『全て脊負投を喰はされた様なものだ、こんな馬鹿な目に遭つたことは八年この方』と、吉村君は歴史を引つ張り出して憤慨した。



2と書ソム
部室の前へ
まよと、こ、た
と顔づき
なやま 1 1

之伸鹿

『ファイターの憤るのは無理がないかも知れぬ』と、私はファイターの爲めにヂンナと外に出ることが徒勞に歸したのではあるが、ファイターの氣持ちに對して深く同情した。

全くあの毒々の存在は、すべてに不快を齎らしたに過ぎなかつた。
最早手段がなかつた。

私は深い失望の沈黙で、二人の後から隨いて外へ出た。

ヂンナは其の時淋し相に柱にもたれて、此方をヂツと見てゐた。

◎
歸り途、三人は馬車の中で話した。

『Nさん、あなたはヂンナの住所を聞いてありますね？』

『え、あります。』

『どの邊です？』

『松浦商會の近くですよ。』

部室は
私と
ギンナ
丈けの
世界で
あつた。



之伸重

『ホツ』と、己れは喜んで、

『事實なんでせうか。』

『え、嘘とかいゝ加減を云ふことは滅多に彼女等にありません。』

『そうですか』と、云ひながら、

『今夜のうちに家だけをハッキリ見定めて置いて、今日夜が明けてから、訪ねて見たいと思ひますが。乾度ヂンナは歸つてゐるでせうね？』

『え、斯うして待つてゐても、その裡あの家から出て來ますよ、待つてませうか。それは何時になることか解らないことであつた、それも確かに歸つて來ると云ふのであつたら、待つてゐてもいゝが、或はあのカフェーで其のまゝ寢入つて了ふかも解らないことだし、又どの道を選んで來ることかも解らないことであつた。』

『兎に角、家を見ておきませう。』

『さうませう。どうして貴方はあの女が其麼に好きなんです？』

『不思議ですなえ』と、自分ながら不思議と云はざるを得なかつた。

松浦商會は十字の一角であつた。それから一町ばかり歩いた所あたりが、かの女の家らしかつた。Nは二三軒を見て歩いたが、一番左の端の前へ來ると、ヂツと仰いで考へてゐるが、『ウム屹度この家に違ひない』と云ふが早い、堅く閉ざされた扉を強く叩きながらロシア語で大きな聲で何か云ふた。サツパリ音がない、しーんとする。彼は更に力をこめて叩いて怒鳴つた。すると漸つと中で應ずる聲がしたかと思ふと、『誰だ?』と、訊いた。

『一寸あけてくれ、聴きたいことがある』と、Nが云ふた。小門が直ぐあいた。懐中電燈を片手に大きな支那人がヌツと現はれた。

『何ぞ御用で?』と、チロくくと三人を見た。

『此の家にはヂンナと云ふ女が住んでゐるだらう?』

『ヂンナ?、ヂンナ?』と、小首を傾けつゝ、

『さア名前は知りませんが、何んでも女が二三人のますよ。』

『そうか、イヤどうも有難う』と、Nは云ふた。首が引き込んで、小門が又閉められた。

『どうも此の家に違ひない、屹度左様だ』と、Nは確信したらしかつた。

『一體この家は何んです?』

『下宿屋ですよ、下等の。』

己れはヂンナは此處所にゐるのかと思ふた。

『ぢや兎に角、夜が明けてから又來ることにしませう』と、云ひながら、商會へと戻つた。

茲で又云ふが、ハルピンでは何處家にも必ず不寢番が居ると云ふ。かれ等は夜一睡もせず忠實に其の務めを守つてゐると云ふ。だから試みに何の家を叩いても、中から『オウ』と云ふ聲のせぬ所がないと云ふ。何んの爲めに不寢番が要るのか、確かに戸

縮りさへしておけば泥棒に襲はれる憂がない筈だと訊くと、イヤ盗難よりも寧ろ遅くなつてから歸つて来る者を待つてゐるが爲めに起きてゐるんだと云ふ。
それぢや其處番人は支那人許りかと訊いたら、いや何うしてロシア人にも澤山ゐる、中には以前將校だつたものもゐると云ふ。窮迫の結果、生きんが爲めの落魄である。

二人の世界

グツスリり寝込んで了つた。

起きあがつた。

ヂツと昨夜から曉方のことを考へた。

チンナ、チンナで己れの頭が一杯になつてゐる。

Nが遣つて来た。

『さア行きませう』と云ふ。遅く行つて若しや出掛けた後であつたら大變と、食事もソコ／＼にして昨夜の下宿へ行つて見た。

中へ入つて靴のまゝドン／＼二階へと、Nに隨いて上つて行つた。胡散臭い顔して廊下や大きな樽の上に坐つてゐた支那人がデロ／＼と、僕の顔を見た。弱身を見せては不可んと思ふて、屹とした眼で睨むが如く見返して遣つた。

Nは一つ一つの室番號を見て歩いた。と書いた部室の前へ來ると、『こゝだ』と領づきながら叩した。中で人の立上る氣配があつた。扉があいた。出て來た姿は嬉しやチンナであつた。

チンナの方でも驚いた。かの女も亦喜ばし氣に笑みを見せながら、握手の手を差伸べた。

然し彼女は立つたまゝで、入れとは云はなかつた。部室の中の汚ないのを、見られ

るのが苦痛らしい素振だった。

Nは祕々と彼女と話した。間もなくNは己れを拉して再び階段を下りた。

『何うしたんです？』と、訊いた。

『チンナは此處で話合つてるのが、外の部室の者に聴えたり、又見られたりするのが忌だから、公園へ行つて待つて来てくれと云ふことでした』と、きかせた。

それではと、そこから遠からぬ公園へ来て、ベンチに待つてゐると、直ぐ彼女は遣つて来た。Nは手を上げて呼んだ。彼女はニコ／＼しながら来て坐つた。

『この日本人は貴女を大變愛してゐる、それが解りますか』と、Nは訊いた。

『え、よく解ります、私も亦この方が好きで堪らないのです』と、金髪は流石に感情を赤裸々に發露した。ヤレ嬉しや、漸つと尊敬から遇れた哩。

『昨夜はお怒りになつたでせう、どうぞ悪しからず、私は板ばさみで、随分悲しかつたわ。』

『あなたは少つとも悪くないんだから』と、己れは慰めた。

夜のあの賑かさに比し、晝の公園は餘りにヒツソリしてゐた。恰んど人の影らしい影もない、僅かに彼方のベンチ、此方のベンチに點々としか見えぬ。通る者も極めて稀れであつた。中には變に思ふて我々を振返つて行くものが時にはあつた。

『オヤツ』と、急にNは驚いて立上つた。

『何うしたんです？』

『あすこに私の知つた奥様が子供を連れて遊びに来てゐる、見られると不可ないから』と、云ひつゝ、急いで遠退く可く、ひとりで先きになつて歩調を早めた。チンナと私とは笑みを交はしながら、その後から彼の足跡を踏んだ。

程經て、

『こゝなら見えまい』と、Nは云つて坐つた。

『ねえチンナ、僕は今少し忙しいんだから、この日本人と二人丈けで遊んでゐてくれ

ない？」と、Nは云ふた。チンナは笑つた。

『でも此の方ロシア語が出来ないんでせう、少つとも。』

『ウム少つとも出来ない人だ、英語なら相當にゆけるけど。貴女は英語は？』

『英語は女學校にゐた時、少し教はつたばかりだけど……でも皆忘れて了ひました。』
『それは困るなアー、でも二人限りになつて了ふと、何んとかなるでせうから、ぢや、いゝね』と、兩方に『いゝね』と、念を押しながら、Nはスタ／＼と急いで消えて了つた。到頭本當に二人限りになつて了つた。黙つてゐることが出来ぬから私から試みに英語で訊いた。『あなたは英語を話せますか』と、それだけは解つたらしい、『否』と首を振つた。否ぢや困る、試みに又『歩いて見ませうか』と、云つて見た。けど、全然通ぜなかつた。私、貴方、行く、父、母、赤ちやん、友達斯う云つて首を振つた。これ丈けしか知らぬと云ふ意味だ。これでは何んとも云ひ様がなかつた、仕方がないから立上つて、彼女の手を引張つて身體を起した。そして其の手を抱え

て、歩いて見せた。それから何一つ話することが出来なかつた。アーアーと嘔みたい
な聲を出しては手眞似足眞似した、それでも通ぜないと、己れは焦つたくなつて來て
口を抓つたり、果ては自身で自分の頬べたをボン／＼叩いて口惜しがつた。所が其の
裡、Nは何か彼女に云ひ残して行つたものか、私と一緒に歩いてお出なさいと云ふ表
情を見せた。私は頷いた。すると彼女は公園の外へと連れ出して、街をズン／＼歩い
た。どこ迄も歩いた。己れは苦しくなつたと云ふ表情を幾度も示した。遂に來た所が
かの女の勤めてゐるカフェーロシアの前であつた。己れは驚いてヂツと顔を見た。す
ると彼女は手と首を振つて見せながら、その隣の家へズン／＼入つた、看板には「福
徳旅館」と書いてあつた。支那人經營の旅館だつた。彼女は宿屋と云へば、此の外を
知らなかつたんであらう。

支那人のボーイが入口にゐた。チンナは恐ろしく眞顔で何やら云ふた。部室の有無
を尋ねたらしい、ボーイは頷いた、そして汚ない洋式の一室へと導いた。かの女も此

塵所へ来たのが始めてらしかつた。何故なら嚴肅な程眞顔であつたことが、其のことを遺憾なく證明した。

部室の中には汚ない机と、鏡と、ベッドと、手洗所があつた限りだつた。外に何一つなかつた。

ボーイは直ぐ再び遣つて来た、部室代の先拂ひ請求である。部室の汚ない代りに安いことも驚く可き程安いものであつた。

部室は私とデナナ丈けの世界であつた。

◎

私は今デナナのことを外のことよりも先きに書いて了ふ。

デナナと福徳旅館で逢つた翌々日であつた。私は又デナナを見たくなつた。然し折悪しく其の日訪問客があることになつてゐたので、私は出掛けることが出来なかつた。すると親切なNはそれでは先方へ自分が訪ねて行つて打合せをしませうと云ふた。恰

度その夜八時から暇であつたから、若し打合せするならば、八時に松浦商會の向ふ角の前にあるペンチで待合はすことにして呉れる様にと頼んだ。

Nは朝早く彼女の下宿へ訪ねて行つた。

一時間、二時間、いくら待つてもNは歸つて來なかつた。例の呑氣な程氣の長いロシア人のことよて、さぞや腰を据ゑて、ゆつくり構へてゐるんだらう。直ぐ歸つて來て様子を知らせてくれ、此方は心配して一生懸命に待つてゐるから、と呉れくも云つて置いたのにと己れは時々平らならず動揺した。

四時間程経つて漸つと歸つて來た。そして僕の顔を見ると、何だか云ひ悪く相にしてゐる。こりや不首尾に終つたナと直覺した所、果して左様だつた。

Nが彼女の下宿を訪ねた所、不在であつた。それぢや大方例のカフェーロシアへ出かけたんだらうと、行つて見た所、そこにも不在であつた。試みに聽いて見ると、あの日本人が來なくちやデナナを見せる譯にはゆきませんと何だか奥齒に物の挟まつた

様な云分だ。そこでNはこりや屹度あの日本人はデナナに大分參つてゐるから、そんなことを云つて此のカフェーへ引寄せ、そして少しでも金を使さうと畫策してゐるらしいと考へた。そしてそのカフェーでは彼れ程日本人が御執心が深いから斯う云へば必ず遣つて來るものに違ひないと思ふたらしかつた。更に其の畫策たるや何うもあの毒々が又々御相伴に與からうと云ふ根柢と、あの給仕婆さんが従つて過分の心付けにありつけると云ふ目論見から、立てられたらしい。更に又斯うすることが従つて此のカフェーの帳場に對して、自分たちの顔が廣くなると思ふたらしい。

Nは其麼事を私に話した。私はツク／＼カフェーロシアが厭になつた。私と云ふものが其麼に甘く見られたかと、對抗上に於ても最早そこへ足を踏み入れたく無かつた。そしてデナナのみが、獨り可哀想な氣がした。あの至純さが刻々そんな感化を受けて行くかと思ふと、おそろしくも亦悲しかつた。

そしてあれツ限りで最早デナナに逢ふことが出來ないかと思ふと、それも永久に此の世に於て、生前に於て、逢ふことが出來ないかと思ふと、たえやらぬ哀愁と、デナナ戀しさで胸が一杯になつた。

デナナに今一度逢ひたい、私はそればかりを思ひ詰めた。

到頭その夜私は單獨で、デナナの下宿へ出かけて行つて見た。所が彼女は不在だつた、彼女の不在はカフェーロシアへ行つてゐるに違ひないと思ふたけど、『そら又デナナを好きな日本人が來た』と思はれるのが口惜しくて、どうしても其處へは氣が進まなかつた、私は悄悄と歸つた。

そのうち愈々ハルピン出發の當日が來た。私は何うしてもデナナと一目相見たい念で燃えさかつてゐた。そこで其の日朝早く、又も單獨で近くの彼女の宿へ訪ねて行つた。すると、矢つ張り不在であつた。錠が扉にピッタリかゝつてゐた。

あゝ絶望、私は暫らく呆然として、そこに立つてゐた。けれども遂に諦めなくちやならなかつた。私は俛だれつゝ二三歩戻りかけた時偶然と云はうか奇遇と云はうか、

一つの部屋の扉がスウーと開いた。見るともなしに己れはヒヨイと見た。そして思はず呀つと驚いて了つた、ヂンナの姉さん分たるファイターの寝巻姿が私の眼に寫つたではないか。

ファイターも吃驚したらしい、二人は思はずニツと笑んで挨拶せざるを得なかつた。挨拶を交はすと同時に、ファイと扉の陰になつてゐた所から男がヌツと首を出した、片手で扉をヨリ大きく開きながら。

視線と視線は矢の如く灑がれた。その男はロシア人であつた。湯氣立つ紅茶を一方の手に持つてゐた。前には箱の儘で、洋菓子があつた。

男は『あれは何者か』と、ファイターに訊いたらしなかつた、ファイターは可成り長く何か云つてゐた。突然『君、英語を話せますか』と、彼は英語で訊いた。私は久々で私に通ずる言葉をロシア人の口から聞いたので、オヤ此の男英語が出来ると嬉しくなつて、『え、話せますとも』と答へた。すると彼は『何か御用?』ときた。

『ヂンナの行先を知りたいのです』と、云ふた。

男はファイターに其れを傳へた、ファイターは其れに答へた。

『ヂンナはナンバー2にゐるんですが、ナンバー2を見ましたか』と、男は紅茶を唇近くまで持つて來ながら訊いた。

『見ました、でも居ませんでした。』

『ファイターは行先を知らない相です。』

『さうですか』と、再びガツカリし、

『いや有難う』と、禮を云ひながら、身體を廻轉した刹那、思はざりきヂンナが向ふから、姿勢いさましく歸つて來た。私は『オー』と、彼女の顔を見るなり、斯う云つた限りであつた。

ヂンナも意外に思ふたらしかつた。そして又喜びも一入であつた、その眼には私の外何も寫つてゐなかつた。



ゴートの一端を
 牛にとりあかす
 キツス
 と
 り
 せ
 ん

之仲良

チンナばかりかと思ふたら、一人のよほくとした汚ない爺さんが一緒だった。彼女は自分の扉を鍵を取出して開けるや否や、先づ爺さんを導き入れた。續いて己れにも入れと云ふた。この前来た時にはあまり汚ないので愛憎つかされると思ふてか部室を見られることを甚だしく好まなかつたが、今日はもう何うでもいと思ふたらしがつた。

部室の中は思ふた程汚なくもなかつた、又亂れてもなかつた。然し殆んど何も持つてゐない様だつた。眼に付いたものは廢帝の寫真と鏡丈け位のものであつた。それにシングルベッドがあつて、此のシングルベッドで彼女が狭いながら彼女の友達と一緒に寝るのかと思ふと、憐れつほくなつた。
 椅子が二つしかなかつた、一つを老人に奨め、一つを僕に勧めたので、彼女は坐るものがなかつたので、その儘立つてゐた。
 僕は僕の椅子の腰掛ける所が、堅い板であつたことに就いては我慢出来たが、あま

これか別れと知つたなら
 云ふべき言葉もあつたら
 強い握手も交はしたら
 何と云ふ呆気なよさの
 別れであつたことなるう
 私は今日歸へる日は
 遠く日本へ歸へる
 の日はなかりが 聰明な
 ゲンナよおまへの心に
 此の日本人の面影を
 刻んでおくれ 私はお前を
 忘れることが出来な
 多感な私は折に觸れ
 時ふれおまの眼と
 姿と言葉を思ひ出すで
 ありう



り其の上が穢れてゐたので、悪いと知りつゝもポケットからハンケチを出して其の上を徹ふた、そして上で坐つた。

デナは何更の様に慌てたけど、己は手を振つて『構はないく、氣にする勿れ』と云ふ表情を見せた、この表情は可成難かしかつた。

フとデナは寢臺の下へ手を入れて何か取り出した。私は其の時あすこに細々としたもの押し込んであるのか知らと思ふた、どうせ押込む様なものだから、佳いものぢやないと察した。

一體それよりも此の老人は何んだらう、それが合點がゆかなかつた。それとなく顔を見て、小首を傾けて見せると、聰明な彼女は早くも悟つたと見えて、『私の父のお友達』と告げた。私は最初見た時から、彼女の客としては餘りに老人であり、みじめだと思ふた。老衰してヨボくの姿であつた。然し或はパンの爲めに或は此の老人にもと先刻から思ふて見た、然し其れ丈は信じられなかつた。父の友、成る程と頷いた。

私は二人の間に可成込み入つた話でもあるのではないかと思ふた。若し左様であつたら私と云ふ者の傍にゐることは、如何に言葉が解らぬとは云へ、氣拙い思ひをするに違ひないと思ふた。兎に角、差支へないか何うかを何よりも先きに確かめたかつた。幸ひファイターの部屋には英語の解る男がゐるから、あの男を介して、デンナーに其れを聞かうと思ふた。

そこで私はツカく〜と扉の外へ出た。よいことにはファイターの扉が先刻の如く開いた儘になつてゐた。

私は扉の外から其の男に、又かと云ふ顔を作られるのが厭さに、強ひて笑顔を見せながら、

「済みませんが、一寸来て頂けないでせうか」と、云つて見た。

「どうかなすつたんですか。」

「いゝえ、實はデンナーの部屋に老人が一人ゐるんです、ですから私が邪魔なら歸りま

すと云つてゐると仰言つて頂きたいんです。」

「オーライ」と、斯う云ひながら、彼は無造作に立上つて、ツカく〜と、デンナーの部屋の前へ来て、デンナーを呼び、二人で會話をした。

彼は私に云ふた。

『この老人は今直ぐかへるんですから、斯うして居てくれと、云ひますよ。』

『左様ですか、イヤどうもお手数です』と、厚く謝意を表して、私は再びデンナーの部屋へ来て、椅子に坐つてゐた。そして務めて二人の話をきいてゐないと云ふ様子を見せる爲めに、あちこちをキョロ〜見廻はしてゐた。聽いてゐても解らないことはデンナーとて知つてゐるんだけど、矢つ張りヂツと耳を濟まされてゐると思ふと、全つきり他國人でも何んとなく薄氣味悪く感ぜられるだらうと察したからだ。

その裡老人が立上つて。そしてポケットの中から確か一圓紙幣だつた、一圓紙幣を取り出しながら、何やら云つてデンナーに渡した、デンナーは受取つた儘黙つて見てゐた、

そして藏ひ込んだ。

何んの爲めの一圓紙幣だらう、チンナの窮迫を父の友達として氣の毒に思ふたからであらうか、それとしては老人の窮迫の方が、もつと甚だしく見えたのに、他人を救ふよりも自分を救はねばならぬ程の身姿だのに。

或は最早通用せぬ舊帝時代の紙幣を、記念の爲めお前が持つてゐると渡したものが。それとしたら日本の夜店で賣つてゐる程珍らしくもないものを、今更記念あしらいでもない様にも思はれる。

何んの爲めの一圓紙幣だらう？ 己れは頻りに考へて見た。然し何うしても解せなかつた。老人は己れとも握手した。そして杖にすがつてヨボ／＼と出て行つた。おそろしく營養不良の顔をして。

何處の國でも、老人と云ふものは淋しい頽廢的の氣持ちを與へるものだ。私は暗い氣持ちで後姿を見送つた。

◎

チンナは直ぐ戻つて來た。そして直ぐベッドの崩れた毛布を綺麗に敷き伸べた。屹度彼女は昨夜一人で眠つたのであらう、そして自分の友達が歸つて來て、その見苦しさを詰れるのがイヤさに手早く着手したらしかつた。彼女は確かに又妹分として姉分に對するの其のことが當然の盡す可き道を盡してゐるかの如くにも思はれた。

然し斯うとも考へて考へられぬことはなかつた、それは姉分が突然歸つて來て、ベッドの上の亂れた様を見て、妙に疑はれるのがイヤさに、斯うして公明正大を明らかに示しておく必要に迫られたのかも知れなかつた。

私は黙つて見てゐた。

流石に外人は生れ落ちるからベッドで育てられたものだから、その整頓は巧みなものであつた。巧みで且つ迅速であつた。

チンナは其れを終るや、もう之でよしと云ふ顔をした。そして室内をグルツと廻ら

すが早い、突然扉に眼をつけて行つて、内鍵をピタリと下ろして了つた。そして始めて落着いた顔を見せて静かに私に近付いて来た。先日可成なぐく啞同然で二人がゐるから、私は啞同志は啞同志で喋べり得る骨合を可成覺えた、そして次の様な會話を半ば表情の力に助けられて通じ合ふことが出来た。

「ねえ、ヂンナよ、私は今日限り東京へ歸らなくちやならない、何んと云ふ淋しいことよ悲しいことよ。」

「東京へ？ 東京へ歸る？ 本當？」と、いきなり机の上へバツタリ顔を伏せて了つた。

「ヂンナ、どうしたの？」と、己れは金髪の頭を抱へる様にして訊いた。

「だつて、だつて、あなたと別れるのが悲しいんですもの。」

あゝ今後私みたいな者を誰が斯くの如く熾烈に愛してくれるんだらうと云ふ様な絶望の悲數も可成交つてゐた。

「東京知つてゐる？」

「えゝ聞いたことがあります。」

「行つて見たかない？」

「どうか私と一緒に連れて行つて下さい、ね、どうぞ、ね、ね」と、彼女は熱心に哀願した。

父も母も兄妹も親類も誰もゐない、私は何處へ行つても構はない身體ですからと云ふ意志がアリ／＼と讀めた。

私は出来るなら是非東京へ一緒に伴ひたかつた。然し東京へ連れて行つて何うすればいゝかと思案に餘つた。どこかのカフェーへ世話をしてみようか、若し其のカフェーで拒むとしたら今度は何うしやう。どこがいゝだらう。イヤそれよりも連れて歸るには第一相當の身姿を作らせる爲めに、差當り纏まつた金が要る、更に旅費にも可成を拂はなくてはならない。

第一それ程の餘分が私にはなかつた。又そんなことで、何かと新聞などに書き立てられることも有難いことではなかつた、それも絶世の美人かと云へば、決して左にあらずして、私には唯かの女の聰明さが惜しまれたのであつた。

兎に角、私はあまりに情に脆い所がある、一度親しくなると、どうしても放れられない人情味のゆたかな所がある、それは特點でもあり、又確かに缺點でもあつた。私は路傍の者の様に冷淡に振り切ることが、何うしても出来なかつた。

「今日は云はゞお別れに來たんです、再び私がハルピンへ來た時、あなたは此の家にゐるか何うかは解らない、又あのカフェーにゐるかも知れない。そして又私は果して此のハルピンへ來るか何うか、それも亦解らない」と、身振り手振り足振りで、漸つと此の意志を傳へた。

チンナは火の消える様な顔をして沈黙してゐた。いつしか其の眼は充血してゐた、中には涙がにじんでゐた。

彼女はいきなり、○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○、

突然扉がコツ／＼叩かれた。彼女は直ちに近付いて行つて内鍵を外した。すると眼に一種の劍のある女がスツと入つて來た。私は直覺して此部屋の姉さん分だナと思ふたから、悪感情を持たせたくない所から、強ひて笑顔を眼に持つて禮をした、彼女も其れに應へた。チンナは何か云ふた、彼女は頷いた。

姉分は一方の椅子に坐るや否や直ぐ机の抽出から小さい箱を取出した、それには針と糸と鋏が入つてゐた。何をするのかと見てゐると、針に糸を通しながら、立ち上つたかと思ふと、ツカ／＼と僕の傍へ進んで來た。そして立止まつた。

見ると其處にはビロードの黒紫の冬コートがかゝつてゐた。それを彼方此方念入りに見調べてゐるが、臆て綻びの一箇所を發見して、そこをセツセ縫ひ始めた。

縫ひ終つてから、

「此のコートを何う思ふ？」と、チンナに訊いた。

『いゝんだわ、いゝことよ』と、答へたらしい。姉分は嬉し相な誇らしき顔をした。何んでも其のコートは古物で何處かで求めて來たらしいものであつた。

ヂンナは羨し相に見てゐた、そして『私には一枚もありません』と云ふて淋しく己れを見た。彼女には冬の何物も持つてゐなかつたのだ。私は黙つてポケットへ手を入れた、そして財布の中から紙幣を取出して、かすかに笑みながら彼女に渡した。すると彼女は受取つてもいゝかと云ふ位、至純な考へで躊躇した。私には其の躊躇が彼女の生命だと嬉しかつた。そして無理に收めさせた。あゝその時の彼女の喜び、私は今斯うして書いてゐても間のあたり、彼女の顔がハツキリ浮んで來ることを覺える。

姉分は今度は反對に羨しく見てゐた。頻りに二人の間には會話があつた、大方いゝ日本人と知合で僥倖ねえ位だらうと、私は察した。その裡、何うした氣紛れからか、私は面白半分ブラ下がつてゐた先刻のコートの一端を手に取りながら、キツスする眞似をして見せた。それは本當に戯談の積りで。

するとヂンナはハツとして悲しげな聲の下に兩手を顔にあてゝ苦惱の様を見せたが何と思ふたかツカ／＼と進んで來て左手をグイと差伸べ、その服の一端を指さして、キツスをしてくれと求めた。己れは直ちにしてみせた。すると漸つと彼女は誇る様な笑みを姉分に見せながら、私にも嬉しい表情を見せた。

私は飛んでもない戯談事が、一瞬時にもしろ彼女に苦痛を與へたことを悪かつたと思ふた。そして始めて其の者の衣服にキツスすると云ふことは其の着用する人間に與ふると同じい力のあるものだと思ふことを、こんなに判然知り得たことがなかつた。

ヂンナは私が姉分を見て姉分に愛を移さうとしたものと思ふたんだらう、眼が劍ヶ峯みたいな其の姉分に。戯、戯談ぢやない。

ヂンナよ、私は矢つ張りお前だよ！

◎
姉分は何故か眼を赤くして欠伸をしてゐた。その裡ヂンナに何か靜かに云ふてゐた。

興物々 おきすきひーんう
一寸お目いり
たつと 去つてると
傳つてくれ
とたのんぢ。



之伸画

チンナは頻りに頷いて、私の前へ来て姉分を指しながら欠伸の真似をして見せ、次にベットを指しながら眼を閉づつて見せた。私は直ぐ解つた、姉分が今眠たがつてゐると云ふことだ。私は首を縦に往復させて見せた。するとチンナは僕の腕を引張つた。『そんな譯ですから此の部屋を出ませう』と云ふのであつた。そのことは却つて好ましいことであつた。

私は直ちに姉分と別れの握手をした、そして扉を開けて二人で外へ出た。階下へ来ると二三の支那人が變な顔して、チンナと己れとを見た、二人は其れに對抗上の強さと威厳とを示すことを忘れなかつた。

私達は街へ出ると、直ぐ馬車を呼んだ、そして其の行先きを全然チンナに任せて了つた。然し内心チンナは屹度福德旅館へと走らすだらうと思ふてゐた。

果して左様だつた。馬車は先日福德旅館の前で止まつた。それから後は先日と同じことだから茲では省く。

彼は歯が鈍りなうは

しなうをろう

か

時々心配

気に

鉄を

視つて
のち



三伸画

福徳旅館を出てから私はデジナに『今から直ぐ隣のカフェーへ行つて了ふのか』と

訊いた。

すると、『いえ一旦家へかへる』と云ふ。それでは二人で散歩がてら歩かうと云ふ

たらデジナは直ぐ諾いてくれた。

私は此の前でも驚いたことだが、この時も矢つ張り驚いた。それは此處僅か隣りにある旅館へ入つたり出たりすることを、さぞやカフェーの主人や又は外の友達に見られることを厭うて、そのカフェーの前を通る時には顔を蔽ふ様にするか、或は小走りして過ぎて了ふものだ。それを彼女は如何にも平氣であつた、堂々として歩いた。

私は其の時思ふた。一旦外へ出た以上は、全然自分の自由である、勝手である。そんな事に迄雇主でも又友達でも嘴を挟む権利が與へられてゐないと云ふ風がアリくと讀めた。相手の日本人をまだ二三度引寄せて散財させ様と云ふ主人の目論みだらうとも、そして又それを知りながら自分が平然と其の日本人と歩いてゐるのを、主人に見

附かつたら、さぞ心苦しい立場でないかと逆思ふても、本人は飽く迄も平氣であつた。こゝらは個人の権利を認めるに於て、又それを當然として云爲せぬ所などが、大分日本と趣きを異にしてゐると思ふた。

街から街へと左側を二人は並んで歩いた。日はカン／＼と頭上から照り付けた。貧しい彼女は帽子を被つてゐなかつた。買ふ丈の餘裕が惠まれてゐなかつた。私は彼女が小手を眉毛の上へ翳して強い日光を避けながら歩いてゐるのを見て可哀想だなと度々思ふた。然し此方が思ふ割に本人は左程氣にしてゐなかつた。

私は顔を剃つて後に塗る液を求めたかつた、そこで買物があるから一緒に来てくれないかと訊いた。彼女は己れの云ふことは何んでも斷はらなかつた。その途中煙草が欲しかつたので道に出てゐる露店で、先日買った煙草と同じのを選び出し、黙つて先日と同じ金額を拂つて其の儘過ぎた。全然無言で品物を買つたのは之が始めてである。

歩いて行くうちに己れは測らずも日本人の藥種店を見附けた。私は日本語で買物が出来ることを嬉しく思ふて入つた。何んだか親しい氣持が湧いて來た。

要求する所の品はなかつた。どこかにありませんかと訊いたら、向ふ側を七八軒左へ入つた所に矢つ張り日本人の此處店があると教へて呉れた。

私は表に待つてゐたデシナに氣の毒だけど、今來た道を少し戻つてくれぬかと云ふ様子を見せて、自分が先きになつた。

教へられて店へ入つて行くと、雇ひの支那人ばかりだつた。日本人は？と訊いたら首を振つた。留守だと云ふ意らしかつた。『それでは此處へ塗るものが』と許り、額を撫でゝ見せた。どうしても其れが解らなかつたらしい。仕方がないから剃刀で顔を剃る眞似をし、次に洗ふ眞似をし、然る後鏡から掌へ液を落す様子を見せて後、『そんな物がないか』と、相手の顔を見た。

チツと其の支那人は考へてゐた。遂に返事は否であつた。己れはガツカリした、こ

んなことなら天晴れ紳士顔が剃る藝當をしなかつたら宜かつたと思ふた。

外にはデシナが、少しく待ちあぐんだ體で、電柱にもたれてゐた。私は濟まない氣がして、もう之れ以上私の用事の爲めに彼女に苦痛を與へまいと思ふた。

そこから直ぐキタイスカヤノの街であつた。私はだから其處から歩いて歸らうと云ふた。するとデシナは『ぢや私し序だから近くの洗濯屋へ寄つて之を』と、ハンケチを出して見せた。私はハンケチなどは自分の下宿で自分が洗はないんだらうかと此の時思ふた。そして其處事は矢つ張り小さい時からの習慣上、洗濯屋へ出すものとなつてゐるのだと思ふた。左様云へば今まで洗濯をしてゐる外國家庭の活動などは一度も見なかつた。見なかつたと云ふと語弊だが下婢のみの仕事であつた。

そこで下婢を使つてゐる家では下婢にさせるが、下婢のない家庭又は獨身者は、みな斯うして洗濯屋に委して了ふのだと思ふた。デシナの如き金錢上に虐けられてゐるものでさへ斯うして洗濯屋へ持つて行くので、全く不思議に感ぜられた。習慣が將

又落魄れたりと云へども下婢の眞似丈けはしたくないと云ふ氣持ちからであらうか。

キタイスカヤノの街は流石に往來は繁しかつた、通つてゐる人も相當の服裝と品位を備へたものが多かつた。

フと横道へ折れる角で、赤靴を磨き屋に磨かしてゐる老紳士を見た時に、私の眼はひとりでに自分の足元へ灑がれた。そして今更の様に汚なくなつてゐるのに赤面した。よくも此處に穢してゐながら、デシナ可愛いやも無いものだと思ふた。汚ない筈だ。其の前々日磨いた限りだつたんだ、全く又磨かす時がなかつたのだ。偶に早く歸つて支那ボーイに渡せば忠實に磨いて呉れるんであつたけど、ロシア氣分を尊重し過ぎていつも曉方近く歸るものだから、ボーイに渡す時が無かつたのだ。

私は急に立止まつた、そしてデシナを顧みて、

『洗濯屋は近いの?』と手眞似た。

『え、直ぐ。』

「さう、ぢや貴女がそこへ行つて戻る迄に私は此處で靴を磨かしてゐるから。」
「え、では左様して下さい」と、彼女はズン／＼と活潑に横道を歩いて行つた。私は老紳士の磨きが済むまでヂツとヂンナの後姿を見送つてゐた。フと眼を落して再び眸を上げた時には、道を曲がつたのか、家へ入つたのか、もう姿は見えなかつた。老紳士が終つてから、私は椅子に掛けて踏臺に足を載せた。そして爲すがまゝにした。

靴は間もなく磨かれた。私は先刻老紳士が拂つた時の金額を知つてゐたから、矢張り其れ文書を拂つて遣つた。然し其れでは餘りに興がないと思ふたので、及び自分だつてロシア語は充分出来るんだと見せる爲め、ロシア人に使つて見たい氣持ちから、磨きあがつた靴を見守りながら、その磨き屋に『ハラシヨ』と云つた、ハラシヨとは『素敵だ』と云ふ意味にも又オーライと云ふ意味にも用ひられた様に思はれた。他人の云つてるを耳にした経験から、それが見事に磨き屋に通じたと見えて、一寸感謝と挨拶

とを兼ねた眼を己れに灑いで、心もただけ首を下けた。己れは心の中でシテやつたりと許り。

待てども待てども、首伸ばせども伸ばせどもヂンナの姿は遂に見えなかつた。私は動かざるを得なくなつた。

之が別れと知つたなら、云ふ可き言葉もあつたものを。強い握手も交はしたものを。何んと云ふ呆氣なさの別れであつたことだらう！ 私は今日歸るのではないか、遠い遠い日本へ歸るのではないか。

聰明なヂンナよ、おまへの心に此の日本人の面影を刻んでおいておくれ。私はお前を忘れることが出来ない、多感な私は折に觸れ、時にふれ、おまへの眼と姿と言葉を思ひ出すであらう。

ヂンナよ、二人は別れる悲しみなくして偶然別れて了つたことは或は僥倖であつたかも知れぬとも私は思ふて見たりもする、で無かつたら二人は別れるに別れ切れな

つたかも知れぬ。さう云ふ苦しい場面で斷腸の思ひするよりも、寧ろ此處あつさりした別れ方をした方が、却つて強い深い印象として残ることかも知れない。
チンナよ、おまへを愛した日本人はお前の爲めに祈る、どうか活き永へてゐてくれ。すこやかに居てくれ。

いつかお前の國に日がさす時ものらうから。
あゝ亡びたる國の娘チンナよ。

快よき人々

ハルピンに我々の滞在豫定は三日しかなかつた。だから三日間のあひだに出来るだけ享樂し、歡樂し、見る所を見、訪ねる所を訪ねたい心算であつた。
所が三日間は瞬く暇に過ぎて了つた。殊に三日目はハルピン心酔、高唱の眞盛りで

あつた。私は此の儘左様ならを告げたら直ぐ又引返して来るだらうとさへ思はれた。
此の熱狂の絶頂に於てハルピンを引上げたならば、われ／＼は飽くまで華麗にして而かも妖艶の趣きある此の土地に對する追想の餘りの烈しさに遂に氣が狂ふて了ふかも知れぬと思はれた。病んで了ふかも知れぬと思はれた。

私にもう一日でもいゝ、二日でもいゝからハルピンに心から酔はしてくれ、獅嚙ましてくれ、この享樂飽くない都、私は如何にしても立ち去ることが出来なかつた。
到頭私は總ての豫定を破壊して了つた。その爲め四方八方に其の旨が打電された。
然し反面、氣の毒に堪えられなかつたのは、我々が宿泊してゐた松浦商會へである。何も知らぬ者が、いきなり飛び込んで来て、寢泊りするのみか、朝から晩まで商會の重要人物たる吉村三郎君に、無理に案内の勞を願ふ厚顔まじさにサゾ皆は驚いて了つたらうと思はれた。口でこそ表面でこそ折角おいになつたんだもの、再び來ることが出来難いでせうから御悠くり滞在なさいと云つてくれるものゝ、さぞかし内心大に

困つてゐるだらうと思ふた。

たゞに三日間厄介になつたことさへ、云ひ難き感謝であつたのに、吉村君の如きハルピンに於ける日本人中の錚々たる人物を案内役に得たことは身に餘る冥加であつた。私は吉村君がゐればこそハルピンの表裏の觀察が斯くまでに敏捷に運んだものと思ふ。若し吉村君の如き此の地の永住者なかつたならば、私は存外平凡にハルピンの外観を觀察し得たに過ぎなかつたであらう。吉村君は「自分は裏面のことに就いては全くの素人で何も知らないから、その道のことはロシアのことだから、ロシア人が一番いゝでせう」と云つて、Nを紹介してくれたんだ。

だからハルピンの表裏は手に取るが如く解つた。私は自分の豫期以上に希望が満たされたのは全く此の兩君の力であつた。

吉村君と云へば、吉村君は我々のおかけで随分迷惑を感じたことであらうと思ふ。何故ならば吉村君は餘りに品行方正であつたからだ。

水上支配人は云ふた。

「吉村君は裏面の消息は全然知らない石部金吉である、だから其の方の案内には全然不適當である。又その方に不適當であつたことが、あの人をして今日の如き大をなさしめたる所以であらう」と、それほど謹嚴な吉村君を、ロシア人ばかりでは心細いからと無理に願つて、いつでも一緒にゐて貰つた。それにも係はらず少つとも不快らしい顔を見せて呉れなかつたのみか絶えずニコ／＼して愉快にハルピンを見て貰ひたいとどそれをのみ望むと、口癖に云つた。「それが爲めには私の出來得る限りを盡します」と安心させて呉れた。その言葉は何處に有難いことであつたらう、泌々と手を取つて感謝したい氣持ちが、一緒に歩いてゐて私の心に幾度襲つたか解らない。

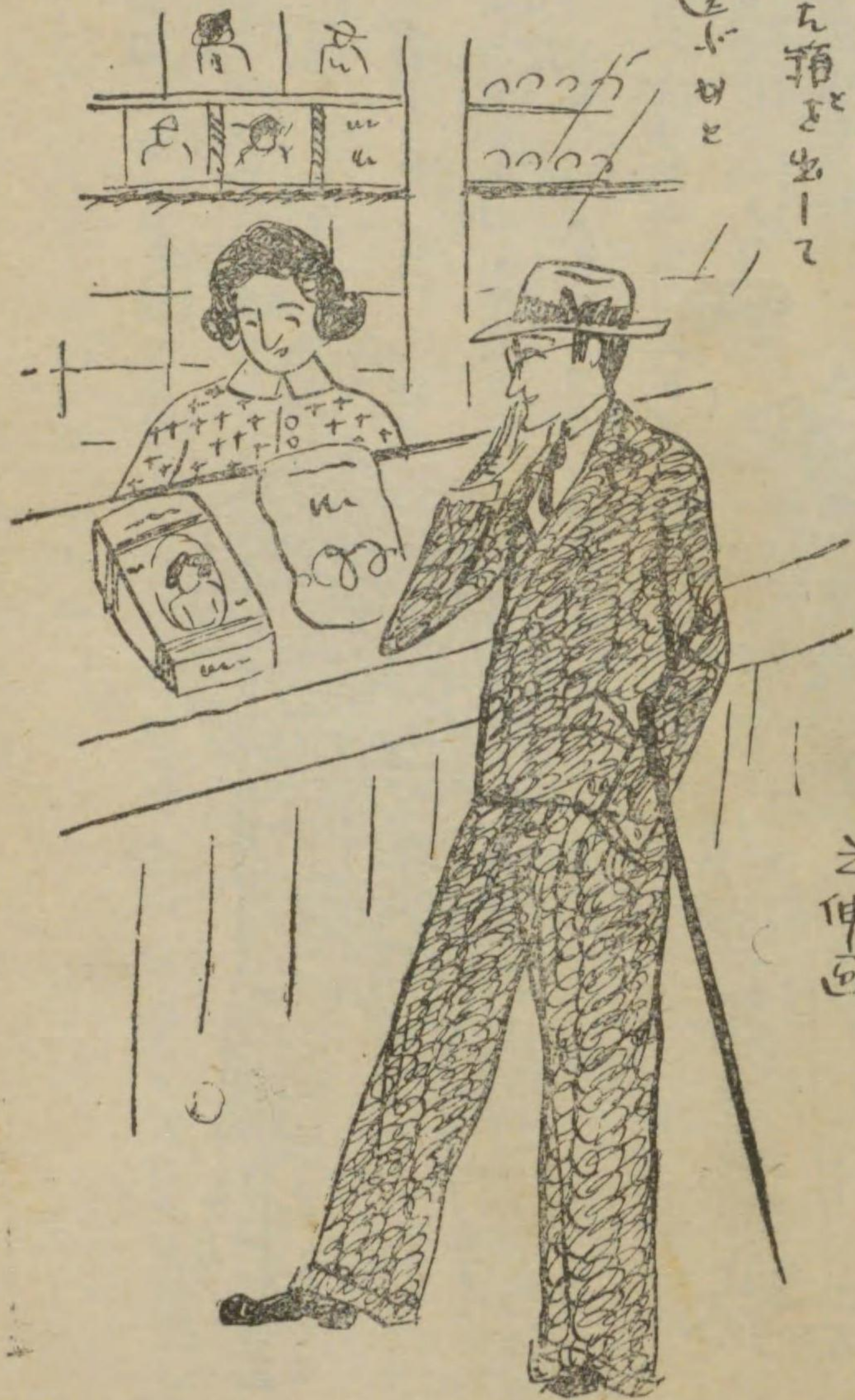
吉村三郎君は確かに精力絶倫の人であつた。我々と夜分曉方の四時まで行動を共にした上、宿へ歸つて眠る。我々は其れから十時十一時頃まで、死んだ様になつて眠るが、彼は左にあらずして、ホンの四時間ばかり眠つたのみで、矢つ張り他の社員と同

じく九時から店へ出る。そして僕等を案内してゐた不在中のたまつた仕事を、僕等の眠つてゐる間に、人一倍になつて働き補ひ、僕等が起き上がると素知らぬ顔をして、如何にも愉快な顔を見せて、何くれとなしに務めてくれた。そして我々は時にあまりの疲労の餘り晝寝でもすると又階下へ下りて、熱心そのものゝ權化の様に働いた、私は感心して物も云へなくなつた。こんな日本人がハルビンに於て活躍してゐてくれると思ふと、誇りのうちに、云ひ知れぬ安心と愉快を思ふ。

我々は北満ホテルに泊らないで、よかつたと思ふた。北満ホテルに泊つてゐたら、これ丈の便宜と精神の喜悅と、良い案内者を得られなかつたであらう。私は幾程云つても云ひ切れぬ程かゝる便宜を興へてくれた支配人水上多喜雄氏と、副支配人吉村三郎氏に感謝しておきたいと思ふ。

さて、話は戻るが己れは以上の理由で、あと二日滞在を永くすることにしたが、それを如何にも水上支配人に云ひ難かつた。優しくしてやれば恩愛に馴れて、早や附け

少女は袋と美人の
寫真を入つた箱を出して
あつたきさきと
あつた
顔を見え



之伸也

僕は型玉

子して

「シヤア、

シヤア、

と云うた。



上つたと思はれるのが苦しかつたのだ、勿論そんなことを思ふ様な人物でなかつたが此方が氣が引けて自然に何んとなしに左様思はれる様な氣がしたのだ。

私は此麼事は夫人に願つた方が一番いゝと思ふた。何事でも女が入ると、物ごとは柔かに且つ又をだやかに進むものだ。幸ひ夫人は心から親切に何くれと好意を寄せられてゐるたから、何んとなしに頼み易かつた。

私は支那ボーイに、『奥様がお手すきでしたら、一寸お目にかゝりたいと云つてると傳へてくれ』と頼んだ。

夫人は直ぐ見えた。

『奥様實は折入つてお願ひがあるんですが』と、三日を五日にした所以を述べ、『就いては御主人の方へは奥様から宜しく云つて頂けませんか、私としては餘り厚顔ましくて何うしても云ひ難う御座いますから。』

夫人は之を聴くと、心から愉快相な顔をして、

『まア、そんなにハルピンがお氣に入りましたか、まアようございました、私は何うしたら永く此處にゐらつしやつて頂けるかと其れをのみ心配してゐましたに。そして御豫定も御座いませうからと、強ひてお留めするのも失禮と控へてゐましたに。そのことは此方からお願ひしたかつたので御座います』と、喜びに輝いて、

『え、主人にも申しますとも！ 主人も屹度喜ぶでせう。決して何のお氣兼ねなしに全でお宅にゐらつしやるお心持ちで、どうぞゆつたりした氣分であらして下さい。何故そんな心苦勞なさるんでせう、存外お氣が小さいんですねえ！』

何んと云ふ親切な言葉だらう、己れは自然に首を三度四度び下けて衷心から感謝した。

私は北満ホテルに泊つてゐたら、何うして此處あたゝかい心の款待を受けることが出来るだらう、私は暫らくは喜びにおのゝいた。

直ちに此のことは夫人から主人公多喜雄氏に傳へられた。水上氏は急いで遣つて來

て、

『何んだ。遠慮する柄でもないぢやないか、君は存外正直な所があるねえ、早から歸つては此のハルピンが解りますか』と、まだくゝゝると云はん許りだ。

揃ひも揃ふた此の夫婦の言葉は、私の氣持ちを、晴天の如く快活に導いた。私は總ゆるものを讚美したい様な嬉しさにこみ上つた。

後の二日をおかけで如何に面白く飛び廻はることが出来たであらう。

讀者は私がこれ等の人の恩愛を記念する爲め、特に之れ丈け書き加へた私情を認め
てくれるであらう。

床屋さん

一日私は自分の頭の毛が何時しか伸びくになつてゐるのを發見した。考へて見れ

ば東京を出てから一度も刈らないのであつた。

私は一度長いアと思ふたら居ても立つても早く刈つて了はなくちや居られぬ性分だつた。そこで、水上支配人に、

『どこか此の邊に日本人の床屋が無いでせうか』と、聞いた。何故日本人で無くちや不可ないかと云ふと、私は頭の毛を一種獨特の刈り方をしてゐるので、それを詳しく説明しなくちや床屋さんに何うしても服み込めないのだ。詳しく説明するには何うしても日本人で無くちやならない、ロシア人では幾程手眞似でも恐らく通じまいと思ふたからだ。

『さア、日本人のと』と、考へて、

『此の先きの方三町ばかり向ふに、ツイ一ヶ月程前まで日本人の店がありました。今は其の後を誰も遣つてゐないらしいです。』

『さうですか、困つたナ』と、暫らく思案にくれたが、例の居ても立てもゐられない

性分がムラ／＼首を擡げ出して、何うしても刈らうと思ふた時に刈らねば承知が出来なかつた。そこで遂にロシア人の店でも構はぬ、どこか此の近所にあつたらと訊ねた。すると水上さんはツと立上つて窓際へ來ながら。

『一寸来て御覧なさい』と、云ふ。私は立つて行つて見た。

『あすこに床屋が見えるでせう、あれがロシア人の店です。』

『左様ですか、然し何んと云つたらいいか』と、コクリと首を捻ねると、吉村君が、

『私が案内ませう。』

『イヤどうも床屋まで来て頂いては』と、恐縮すると、

『でも私があるなくちや解らないでせう、その代り説明文けして歸りますから。』

『ちや、どうぞ宜しく』と、こんなことに迄重要人物を煩はすんだから、全く氣の毒に堪えられない。

二人は其の店へ入つて行つた。三十五六の色の白い美男子が主人だつた。

私は云ふた、兩側から正面 悉く短かくして、たゞ前の方丈けを長く伸ばすのだ、所が大抵の店では此の邊りを體裁上無理にも長くしておくが、私のは全然違ひますから、その積りでかゝつて貰ひたい、と、頭の各部分を指示して注意した。

主人はデツと聽いてゐるたが、説明が納得されたものか解りましたと云ふ。それでは刈つた後で、異國人と見て不法な値段をフツかけられては取返しが附かぬから、豫め其れを定めて貰ひたいと吉村君に云ふた。先方の答へた値段は東京京橋の倍額であつた。『馬鹿にしやがる、あなたがロシア語が出来ないの見込んで足元を見てゐる』と、吉村君は憤慨の口吻を洩らしながら、

『どうしますか、旅の者と見て吹ツかけて居るなと思ふと、張り倒して遣りたくありませんが。』

『えゝ構ひません、一旦刈らうと思ふたんですから。』

『いま／＼しいけど、それなら左様しますか』と、云ひながら、其の値段承諾の旨を

先方へ通じた。

『これで何も此の男に云ふことはありませんね。』

『ありません。』

『それぢや私は歸ります、萬一解らぬ様なことがあつたら、此處の下働きの支那人を私の店へ寄越して下さい。』

『えゝ承知しました、色々どうも』と、私は椅子に坐つた、吉村君は出て行つた。型の如く白い布の大小二ツが首に巻かれた。

これから見物だぞと、己れはデツと鏡に寫して注意してゐた。すると彼は最初は矢張りバリカンを用ひて左右の毛を刈つた、こゝ迄は先づ無難であつた。

次に彼は鋏を取上げた、それは日本の物と比べ物にならぬ小さい鋏であつた。至で爪取鋏同然であつた。それで黒い堅い毛を刈り出したのだから、何時終るものか際限がなかつた。搗てゝ加へて悠暢なロシア人と來てゐるから、己れの氣短かい性は焦ツ

たさにムツとした。「早くツ」と云ひたかつたが、その早くが出ないんだから仕方がない。そこで己れは早くと云ふことを知らず方法として、足を駆足させる様にジタバタ動かして見せた。すると彼は黙つて膝を手で壓へた。静かにしてゐらつしやいと云はぬ許りだ、何を駄々をこねるんだ、茶目してゐるんだと思ふたらしい。それではと今度は又指と指で鉄を作つて頭の下の方から急速度で切る真似をした。すると、床屋は「え、仰せの通り私は今短かく刈りてゐますよ」と、云ふ意味に受取つた。私はもう何を云つても駄目だと苦笑して観念して了つた。時間が惜しい〜と思ひ續けた。

全く床屋から見ると、金髪のような柔かい毛と違つて日本人の堅い黒いのにブツかつたのだから、大分勝手が違つたらしい。柔かい毛をズン〜刈るには其の短かい鉄は適してゐるたかも知れぬが、私には不適當であつた、彼は齒が鈍くなりはしないだらうかと時々心配氣に鉄を調べてゐた。

その裡あれ程念を入れて云ふてあつたにも係はらず、短かくする所の部分を體裁上

矢つ張り長くした。己れは烈しく首を振つて覺えた許りの「否」を繰返した。そして鉄を指で又造つて短かく刈る様をして見せた。主人は小首を幾度も傾けた。そんなことしては此の唯さへ形の悪い頭が代無しになつて了ふと云はん許りの顔をした。

恰度そこへ、吉村君が「まだですか」と、入つて來た。ヤレ有難いと許り、己れは大に先刻念を入れておいた通りにして呉れたい、頭の形が假令どんなに醜くならうと己れが己れの頭を氣儘通りにするんだから、決して餘計な心配せずに約束通りにしてくれと傳へて貰ひたひと頼んだ。それを吉村君は先方へ云ふた。日本人で此麼變な刈り方を喜ぶのか知らと、不審に思ひながらも遂に意を決して刈つてくれた。おかげで己れの意志通りの頭になつたので、

『非常に宜しい』と、覺束ながらも發音して遣ると、床屋の主人公妙な顔して『こんな刈り方をすれば非常に宜しいと賞められるのか知ら』と、今更の様に繁々と謎の頭を見てゐたつけ。

美しき母娘

松浦商會の横町に一ツの簡易食堂があつた。晝の時は可成賑はつてゐた。私はロシア中流の人たちは何處所で晝飯を済ますものか見たくなつた。そこで恰度この商會へ休暇を見習に來てゐる日露協會の實業生を呼んで、

「君はロシア語が出来るか」と、聞いたら、

「少し位」と、答へた。

それでは一緒に來てくれと云つて、その食堂へ出掛けて行つた。

中へ入つて行くと、驚く可き大男が帳場に控へてゐた。外に二人の女性がゐた、一人は脊の高い色の白い女だつた。その高い方がツカ／＼と僕等のテーブルに近づいて來た。

「何にしませう？」と、訊いたらしい。晝食は二ツに別れてゐた、並は四十錢、上等は六十錢であつた。己れは上の方を云ふた。

第一にはスープが出た。

ロシアのスープには誰しも驚く、大きな鍋の中に汁だの肉だの、ヂヤガタ芋だの葱など様々が含まれてゐた。そして別に皿を附けて來て、その皿へ鍋から掬ふて取るのだ、その量は實に多い、大概は此のスープを見た丈で満腹して了ふ。況んや其れを全部喰つては、迎ても外のものは喰へやしない。だから私はロシア料理はスープとパンで澤山だと云つて、外には何も喰へなかつたことが度々あつた。

實際ロシアのスープはうまい。

次には鳥のあけたのが出た、又それが大きい、己れは半分しか喰へなかつた。最後には珍らしい蜜で煮た色々の果物が運ばれた。パンが外に七八切れ出た。

以上で漸つと六十錢とは驚くぢやないか、皿こそ三皿だが、量から云つて、確かに

日本に於ては其の四倍額を拂はなくてはならない。四倍拂つても此塵うまいのは迎ても喰はれやしない。

ロシアへ来て驚くのは常に各皿毎の量が多いばかりではなく、パンが澤山だ、日本だと精々三切れ位しか喰べられぬが、ロシアへ来ては十切れ程積む。どうして此塵に喰へるのかと呆氣に取られるが、ロシア人は平氣だ、あせらず迫らず悠々として平ける。

ピフテキなんかの大きかつたら、思はず『ヒヘー』と云つて了ふ。

そこは普通のカフェーとは違つて、純然たる簡易食堂であつたから、女給なんか笑顔一ツ見せない。サツサと運んでサツサと持ち運んで了ふ。用なくしては斷じて近付かない。ロシアには珍らしい程淡泊してゐたのが氣に入つて、其れから二度も私は行つた。

二度目には大膽になつて一人で行つた、六十と横に書いてある所を黙つて指さすと

それで通じた。

その歸り掛け、恰度松浦商會の裏で、此の食堂から向ひ側に當つてゐる所に一ツの菓子屋を發見した。私はブラ／＼と其處へ立寄つて見た。扉の硝子をすかして中を覗くと、十六七の少女が賣場に立つてゐた。

私は外に立つてゐては充分に見ることが出来なかつたので、思ひ切つて扉を押して入つて行つた。少女は笑顔一ツせずに見詰めた。

私も見た、そして思はず小さく聲をあけた。

『オ、何んと云ふ美しさだらう、全で天使の様だ。』

私は硝子箱の中に美しく並べられてゐる菓子を珍らし相にした。そして暫らく日數が経つても解けない様な菓子があつたら其れを日本へ土産に持つて歸らうと思ふた。私の見た菓子の中には色々の果物を砂糖で堅めたのが一番多かつた。その外はチョコレート製であつた。

そのチヨコレートにも色々種類があつた。私は内地で全く見られない珍しいのを発見し、更にそれが日に堆えるらしかつたので、其れを買ふことに定めた。すると少女は袋と美人の寫眞の入つた箱とを出して、どつちを選ぶかと許り顔を見た。私は此方を選ぶと許り美人の箱を指した。

然し其の美人が、あまり氣に入らなかつたので、もつと素敵な寫眞のをと云ふ意志を示した。すると彼女は柵を指さして、その中からお選びなさいと默示した。私は其處で箱を選択した。

小さい菓子箱は應て選擇された二ツの箱に満たされた。こゝまで運ぶに私共は全然動作と表情で物を云ひ口は一度も利かなかつた。値段は机の上にあつた紙へ數字で書いて貰つたから、譯はなかつた。

斯くして、私は神々しいばかりの清淨さを見せた此の美しい少女に依つて包まれ、少女に依つて渡された二ツの綺麗な菓子箱を小脇に抱へて、インクと出た。フと振

向いた時全然無言の此の取引が流石に可笑しかつたと見え、少女は微かにニツと笑んでゐた。

商會へ歸つて行くと、

『一人でよく出られたものだね、どこへ行つて來た』と、訊かれたから、實は簡易食堂から菓子屋へと寄つた、菓子屋には斯うくした少女がゐたと話をすると、

『あれは舊帝政時代のロシア第一の大工業會社の技師長の落魄だ。一時は月に五千圓も収入のあつた人だ』と云ふ。道理であの氣品で菓子屋のお嬢さんは變だと思はれた筈だ。

『あの御嬢様なんか其處家庭に育てられたので、以前は家庭教師附で教育されたものだ。フランス語なら今でもツルくだ。お母さんは又ドイツ語なら何んでも話せる。それ等のことから想像しても、あの人の家庭の以前の裕さが忍ばれるではないか』と、水上支配人は云ふた。

それと聴くと、己れはも一度何か買つて来て見たい気がした。東京へ歸つてから、方々の土産は一切みなあの菓子にしてはう、美しい天女の様な少女が包んでくれたと云ふ言葉を添へて出したら、同じ菓子にも箱が附いて、ヨリ有難く思ふて呉れるだらうと思ふて、再び其の店へと翌日單獨に出かけた。

今度は娘がゐらなかつた。お母アさん許りであつた、矢つ張り何處かしら名流の育ちが顔の上に現はれてゐた。

「貴女は獨逸語を話せますか」と、久々で己れは獨逸語で當つて見た。すると果して水上支配人が云つてた様に、

「話せます」と、きた。話せますと云はれて俄かに狼狽したのは僕である。然しウロ覚えながら、ポツリ／＼と口を切つた。

「私は昨日もお店へ買ひに参りましたんです、そして味がよかつたから、又來ました。」
「え、娘がそんなことを云つてました、全つきり言葉の通ぜない日本人が來ました

つてあなたはフランス語は如何？ 娘はフランス語なら上手ですよ。』

私は首を振つた。

これも水上支配人の云ふてゐた通りであつた。

「昨日は之を頂きました。今日も之を買つて行きます」と、又昨日の小さい細長いチヨコレートを運び、箱も運び、そして詰めて包んで貰つた。此のお母さんの坐つてゐた机の上を見ると、本が披きかけたまゝになつてゐたから、

「これは小説ですか」と、訊いて見た。

すると、彼女は箱を包む手を止めて「え」と答へた。

「誰れの？」

「トルストイの」と、答へた。流石に外の一般のロシア女と違つて、店番をしながらも暇があれば、斯うして讀書してゐることなどが、いよく彼女の前身を無言の裡に語るものであつた。

折柄そこへ客とも附かぬ、この家の知人らしい女が一人訪ねて来た。彼女が何か云ふと其の女はデツと私の顔を見て、英語で話かけて来た。いつハルビンへ来たただの、どこに泊まつてゐるかだのと訊いた。私はツイ前の松浦商會の上になると答へたら、『オ、松浦商會に』と、二人で驚いて、『まあ左様ですか、水上さんを私によく知つてゐます』と、店の奥様は聽かせた。そして二人で互にロシア語で何だか云ひ合つた。この日本人はあの松浦商會のお客らしい、シテ見れば日本に於ける相當の紳士に違ひないなどと云ひ合つたらしく思はれた、何故かならば二人が話合つた後に私を見た眼には確かに夥だしい尊敬が新たに含まれてゐたから。昨日の少女がゐなかつたことは確かに私には心淋しい一つであつた。然し彼女の母親と親しく斯うして意志を通じ合ふことの出来たことは、その心淋しさを慰めるに充分であつた。

美しき母娘よ。

晚餐の招待

ハルビン満鐵公所長古澤さんから、晚餐に僕と眞山君が東支俱樂部へ招ばれた。東支俱樂部はハルビンの中流以上の家庭の唯一の娯樂場で、設備の宏大なる、恐らく東洋第一だと、一緒に出掛ける水上さんは云ふた。態々自動車を迎へに來た。俱樂部は東京で云はゞ山の手にあつた。下町(新市街)は、例に依つて圓い石を敷き積めた險惡な道だが、一度び山の手へ來るに及んで、道は砥の如く美しい、恰もレールの上を走つてゐる様だ。俱樂部へ着くと、入場券を賣つてゐた。たゞ庭園丈の散歩者でも、又料理を喰ふものでも必ず買はなくちやならないのだと云ふ。入つて行くと、古澤さん始め満鐵の社員の人たちが、既に待つてゐた。私の外に陪

賓が四人あつた。

『これで全部揃ふた』と云ふので、古澤さんは食堂へ案内した。純粹なロシア料理の御馳走である、どれも之も珍らしい喰つたことのないものばかり。

葡萄酒が出た、シャンパンが出た、ウオツカと云へば己れは今思ひ出しても冷汗が流れる。何かと云ふと、私は酒は一滴も飲めない程の下戸なんだ。だから大抵こんな場所へ来ると、水で済ましてゐる。所が何所の間に持ち運ばれたかテーブルの上に好きな水がある。己れは大きなコップに満々と酌いだ。そして諸君は酒を、僕は水をと許り、突然口に當てゝ一氣にグーツと飲んだ、所が何んと云ふ強烈な刺戟だらう、己れは呀ツと驚いて、慌てゝ吐き出さうとしたが、あまり勢よく飲んだので全部胃袋へ行つて了つた。己れは見る／＼裡に蒼白になつて『ウーム、ウーム』と云ひ出した。横にゐた古澤さんが心配して、

『何うしたんです？』

『いや、ナニ實は、そ、その、これを水だと思ひまして、一口グツと飲んだ所が』と、其の儘を指さした。

『これを水だと思ふたんですか、これはウオツカですよ！』

『ウヘーこれが名高いウオツカ』と、それを聴くと己れは益々苦しくなつて來る氣が仕出して來た。人一倍の下戸が酒中の強烈比ひないウオツカを、水と心得てガブツと遣つたんだから堪らない。大コップに折角つがれた高價なウオツカは其の儘、放擲せざるの止むなきに至つた。

『一寸御注意すればよかつた、私は先刻満々と酌がれた時にこりや酒豪だ哩と感心して見てゐたんです。惜しいですなア』と、人一倍酒好きな古澤さんはコップを見詰りながら云ふた。己れは折角御招待に與かりながら、飛んだ失策をして申譯もありませんと云ふ顔をした。すると陪賓の誰かど、

『他見男さん、これこそ好箇の題材だ！』と茶々を入れたので、漸つと申譯が立つた

様な顔に返つて、『全く、いゝ材料でした。我々には此處ことが生命ですからなア』と、御馳走して呉れた古澤さんの氣持ちを、漸く失望から満足に轉換した。

古澤さんは我々の爲めに、屢々高價いシヤンパンをボン／＼抜いて、健康を祝された。これ以上の款待法がないと云ふ款待法であつたことは光榮であり、又限りなき満足であつた。

そこには美しい女ボーイのロシア娘が十四五人ゐた。いづれも一粒選りである。所が其の一人だつて此方のテーブルへ來ない。さア大に不服だ、況んや異國情緒にはやる陪賓一同、最初のうちは神妙に溫和しく控へてゐるが、漸々酒が廻はるに従つて失禮なことを云ひ出した。

『どうも古澤さんは我々若い者に同情が無くて不可ん。何故かれ等美しいものを此方へ呼んで呉れないんだらう、古澤さんな酒なくてなんのおのれが櫻哉かも知れんけど。我々は女なくてなんのおのれが……』

『解つた、解つた、こりや僕が悪かつた』と、古澤さん、すつかり頭を搔いて、

『實はあゝ云ふ美人に出て欲しい時には豫めテーブルを定める時に、左様申込むことになつてゐる。それをツイ失念したものだから、支那ボーイになつて了つた。成程我我にした所で、支那人のニキビ顔がいゝか、ロシア娘の眼元涼しいのがいゝかと云へば、老いたりとは雖も矢つ張り眼元涼しいのが嬉しいからねえ』と、早速共鳴した。共鳴したものゝ、最早どうすることも出来なかつた。だから遙かに遠望の慾を逞うして、

『君、左から三番目が素敵だぞ。』

『イヤ、僕は右から四番目がいゝ、オホツ此方を見た、オホツ僕を見た、オホツ笑つてくれた、うツ、うツ、うれしい、日本帝國萬ざア一』と、若氣の至りが大に出る。『こゝらの女は願書を出して、通過するか何うかなア』と、誰かど云ふ。願書とは一代の傑作だ。



「さア、通過せぬことは無いだらう、要するに金次第さ。」
 「どれ丈け出せばいゝんだらう？」と、だんく具體的に話をすゝめる。すると古澤さん、

「そいつは一ツ直接談判で、君當つて見たら何うだ、君は昔から直接談判なら僕が
 ると飛び出た男ぢやないか」と、云はれて、提案した男すつかりベソ搔いて、首を抱
 へて了つた。

全く東支倶楽部の女ボーイは美人揃ひであつた。

「あんなのが一寸脊中を叩いて呉れたらサッ嬉しいだらうなア」と、早から身震ひし
 てるる者がある。血の氣がアリ過ぎて不可アーン。

古澤さんは云つた。

凡そロシヤ人ほど物ごとに徹底的な國民でありやしない、破壊する時にはウンと破
 壊し建設する時には又ウンと建設する。極端から極端である。富豪の遊び振り一つ見

今かくと自動車も持てるんだ。

ピカッ。ピカッ。

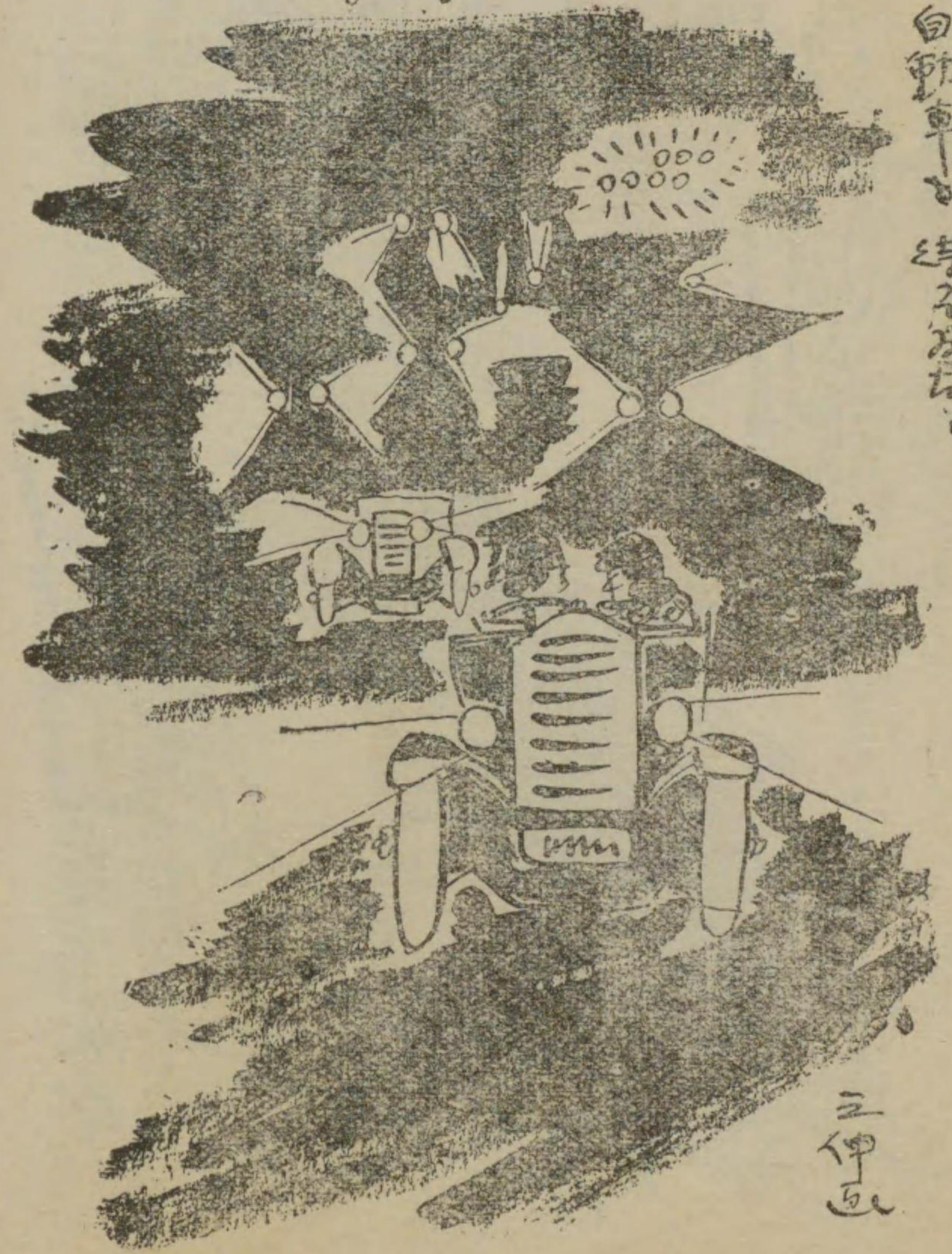
と先方の

間に光る

毎に

あふた

と云ひ
合つた。



ても其の遊び振りが徹底してゐる。あらゆることを爲す、そして愉快の限りを盡す。

又ロシア人は毎日を如何にして楽しく暮さうかと云ふことを考へてゐる。明日と云

ふものを考へてゐない、その日その日さへ愉快で華かであればいと云ふ考へだ。生

活を楽しむ國民だ。ところで日本人は生活に苦しんでゐる。ロシア人は幾程金がなく

ても其の信條の下に、金が無ければないで、仕業が終つたから愉快に其の日を過すこ

とを考へてゐる。決してクヨクしない。金のある者は又ある者で遊ぶ。

所で日本人は金が無いと、がっかりして遊ぶ勇氣がない、そして終日セツセと働く。

ロシア人の様に働く時には働き、遊ぶ時には遊ぶと云つた風がない。

つまりロシア人は貧乏暇ありだけど、日本人は貧乏暇なしである。

ロシア人は萬事が此の筆法だから、決して子孫の爲めに美田を遺さうとか、財産を

遺さうとかを考へてゐない、自分の金は自分の一代で費ひ盡さうと思ふてゐる。死ん

たら子孫が何うならうが、更にお構ひなしである。そんな事を構つてゐる日にや自分

は楽しい日と生活を迎へられないと思ふてゐる。實に享樂的な國民だ。

それから話はモスクワ(モスコ)のことで、水上さんと二人で見聞した富豪の夜の豪華なる歡樂振りを共に語つた。殿宇の如き享樂場の華麗さ艶麗さから、彼等が故意に酒罈を投げ飛ばして、高價なる硝子戸を破壊し、いきなり幾千圓を投げ出して、呵々大笑して快を貪ほる有様や、或は備へられたるロシア風呂に於ける彼等の限りなき淫樂の放逸さを、面白く語り聽かせた時には、まるで夢でも見てゐるやうな氣持であつた。

その頃になると、數百組と云ふロシアの紳士淑女が互に手を取り合つて夜の散歩にと此の俱樂部の庭園へと集まつて來た。中には女性ばかりで來るものもあつた。その美しさ、妖艶さ、生を享けて今まで見たこともない。

それ等の人たちは折柄始まつた大音樂を或はベンチで、或は愛人と手を取りながら立つてヂツと耳を濟ましてゐた。

水上さんは云ふた。

「此處へ來る人は皆相當の家庭の家族や子女ばかりです。だからハルピンに住むロシアの素人美人を見ようと思ふたら此處の俱樂部です」と、先づ杯を乾し、

「ハルピンと云へば全ロシアでハルピンだけが舊帝政時代の面影を遺してゐます。だから町を歩いて御覽なさい、富めるものは自動車で、貧しきものは裸足で歩いてゐるぢやありませんか、あまりに貧富の差が極端です。云はゞハルピンは舊ロシア帝國の縮圖であります。かれ等は常にいつか國が何うにかなるだらうと思ふてゐる、つまり再び以前の如くなると考へてゐる。目下支那人なんかに壓迫されてゐても「いまに見ろ」と云ふ氣慨がどこか知ら眉宇の間に現はれてゐる。兎に角ロシア人ほどヌーボーで、どこかに可愛氣があつて、自由に暢々してゐる國民は一寸少ない」と、自分の見た所をポツリ／＼と以上の如く話した。

さる程に庭園へは益々人が増えた。萬と云ふ人數が入つても樂に歩ける程、庭は廣

正面の大音楽堂には百人ばかりの楽手がギツシリだ、それ等が一齊に吹奏したり、弾いたりするんだから、壯觀云はむ方ない。それでは此處ことが一週間に一ぺんある位かと訊くと、毎晩あるんだと云ふ。そして毎晩の様に之れ丈けの人が集まるんだと云ふ。遣るものも遣るものなれば集まるものも集まるものだ、どつちもよく飽かないものだ。楽手の中には故國の難を免れて来た名手が澤山交つてゐると云ふ。みな一粒選りで、どこの國へ出しても恥かしくない者ばかりだと云ふ。その故だらう、耳に傳はつて来る音楽の美しさ！ 壯快さ！ 實に恍惚して了つた。

食事と雑談が終つてから、少しく庭を散歩しやうと云ふことになつた。みんなはドカドカと立つた。そして大勢の中へと下りて行つて、各自に都合のいゝ場所から、音楽に耳を濟ましてゐた。突然何だかガヤ／＼後にするので、フイと振返つて見た所、支那ボーイの一人が古澤さんと一緒に來た某君に頻りに何事か云つてゐる、某君その

言葉が解らぬと見えて、「え？ え？」と許り、穴のあく様に其のボーイを見た、最初の間は支那人は小さい聲で云つてゐたが、小さい聲では解らぬのか知らと漸々聲を大きくした。それでも解らぬものだから、遂に焦つたがつて、黙つて某君の下をヌツと指さした、見るとコワ如何に！ 御念入りにも、まだ白いエプロンが、天つ晴れ東洋の君子からブラリツと禪の如く下がつてゐる。某君驚くまいことか『ヤツこいつあ失敬』と、云ふが早いか急いで取外してボーイに渡したけど、時や既に遅い、何事だらうと、さつきから見えてゐた多くの紳士淑女連、この醜體を見て、思はずブツと吹き出したものだから、某君すつかり悄けて了つて、『他見男さん後生だから、之れ丈けは書いて呉れるなヨー』

その裡僕は便所へ行きたかつたので、諸君待つてゐてくれ給へと云ふが早いか、中へ再び入つた。そしてWCは何處だと訊いたが、そのWCが支那ボーイに通じなかつた。こりや困つたと思ふたが、直ぐ薄暗い隅の方へ引張つて行つて僕は型を示して、

『シャアー、シャアー』と云ふた。するとボーイめ思はずブツとフキ出して、黙つて指でさした。

『有難う』と、云つて教へられた通りを行つて、こゝかあすこかと探して見たが、どうしても解らない。どこにもWCと書いてない。當つて碎けると許り、出合ふ毎のロシアの紳士を掴まへて『英語を話せますか』を訊くが、みなボカンとして、妙な顔して僕の顔を見る許りだ。まさかロシア紳士を掴まへて、シャアーでもあるまいと僕は事を告げるに従ひ右往左往した。

所へ折よくエブロンエブロンの失敗者が、電話をかける爲めにと、遣つて来たので、思はず助け舟と獅噛み付いて、『後、後生だから教へてくれ、べ、べ、べ、イヤ、だ、だ、W Cはどこだ?』と、訊くと、

『オヤまだ済まないのかい?』と、驚きながら、階段の所へと導き、『この突き當りだよ』と云はれて、之ぞ天の助けと許り宙を飛んだり。

用を済まして、今度は先刻みたいな右往左往と云ふ様な醜い所作はなさず、謹厳そのものゝやうな顔をして、ゆたりゆたりと許り、地下室から登つて来た。

登り詰めた所に、それは大きな鏡があつた。『なんと己れの男振りか?』と思はず寫して見ると、矢つ張り大に捨て難い所がある。思はず頬べたの右左りを撫で、悦に入つてゐると、思はず二ツの美しい娘の顔がハツキリ現はれた。オヤと振返つて見ると、これはくと許りの美人、邪魔になつてはと、急いで其の位置を退くと、かれ等はツカくと進んで行つて、髪に手を當て、悪い所を訂正した上、サツサと庭の方へと行つて了つた。

その裡幾人となしの女性が、一室から出て来ては此の鏡の前で必ず自分の姿を點検した。一體その部室は何んだらうと、戸のあいた拍子に見るともなしにフイと見ると、化粧室であつた。女は此の倶楽部へ來ると、必ず一度此の化粧室へ入り、化粧が終ると、此の姿見の前へ立つて『これなら男が振返つて見てくれるか知ら』と、試験する

のだった。

己れは其處に立つてゐて、各人各様の見方をして行くのが如何にも面白かつたので隅の方にて其れとなく注意してゐた。

中には突然入つて来て、思はず鏡に寫るので、驚いて狼狽するものがある。中には又如何にも美人でございと思はず自分で自分に惚れ込んで、ニツと笑んで行く俺見たいな自惚さんがある。かと思へば『此のわが顔に非難のある可きや』と許り、鏡なんするものぞと尻目にかけて行くものがある。見てゐると、各人の個性が躍如として出てくるので興が深い。

自分で自分に色目を使ふてゆく不屈者もあれば、思はず投げキツスをしてゆく熱情女もある。そんな時には俺は態とニツと首を出して見せるものだから、アレー人がゐると驚くまいことか、氣極り悪さに逃げる様にして行く所など、いくら居ても飽きが來ない。

此處は初めて入場して來た者、及び入場してゐたものが化粧崩しを直しに入つて來る部屋であつた。

姿見は高さ二間、幅一間半位の大きさがあつた。

某君の電話は随分永かつた、何んでも自動車の催促らしかつたけど、その自動車が何處かへ出た限りまだ歸らぬ、大方其方へ廻つたんでせうと云ふやうな會話らしかつた。

漸つと出て來た。

『オヤ他見男さん、まだ此處にゐたのかい？』

『君を待つてゐたんだよ。』

『旨く云つてゐるぞ、僕に托けて美人を賞翫して居たんだろ？』

『或は然らんやですな。』

『ですなも無いものだ、斯うして話してゐても、君は僕の顔を見ないで横ばかり見て

ゐるぢやないか……おツとあれは美人だね。」

『君だつて僕の顔を見ないで美人の方を。』

『左様さ、男と云ふものは左様したものだよ』と、ハルビンに永くゐる丈けあつて、ロシアかぶれしたのか、云ふことが徹底してゐる。全く男と云ふものは左様したものだ。恰度そこへ僕等の戻りが餘りに遅いと云ふので陪賓のB君が探しにと遣つて來た。

『オイどうしたんだい？』

『我々は須らく美人を賞翫してゐる、君の顔を見てゐるが良い。』

『こいつめ』と、ボンと脊中に喰はして、

『他見男さん、君、ロシアの賭博を見た？』

『いゝや。』

『見せて遣らうか。』

『どこで遣つてゐるんだ？』

『ハハハハ。』

『ウン？』

『此處にさ。』

『此の俱樂部にかい？』

『左様だよ。』

『そんな所があるのかい？』

『あるとも。』

『勿論祕密に遣つてゐるんだらう？』

『公聞さ。』

『賭博の公開？ そ、そんな馬鹿な。』

『だつてあるから仕方がないよ。』

『ぢや巡査が吐らないんだね？』